

---

# 聖者の気紛れ

ZIRAN

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

聖者の気紛れ

### 【コード】

N1804K

### 【作者名】

ZIRAN

### 【あらすじ】

幻想郷の大晦日の夜。白蓮はあることを願った。それがすべての始まりだった。

## 冒頭（前書き）

キャラ崩壊の可能性が高いのでご注意ください。俺設定もはなはだしいか  
もしれないご了承を。

## 冒頭

### 大晦日の命蓮寺

寺の縁側で一人、空を眺めている女性が居た。

その女性の名は聖白蓮。この命蓮寺の住職みたいな存在だ。そして、今年の春先までは地底で封印されていた大魔法使いである。もうすぐ明ける年の夜空を眺めながら、白蓮は、ほう、と小さくため息をした。白くなった息が夜空を泳いだ。

「ため息をつくなんて、何か去年に未練でもあるのですか？」

奥から一人の女が現れた。虎柄の髪をした寅丸星である。この命蓮寺にて毘沙門天の代理人をしている妖怪である。神ではない。白蓮は星に気づくと照れ臭そうに笑った。

「まあ……そんなところね。正直やりたいことがあつたけれども、何しろ数百年ぶりに娑婆に戻れたものだから……」

思い返すように遠い目で夜空を見渡した。空には冬の星々が砂浜に散りばめられた砂のように小さく輝いていた。思い返せば、まだ彼女はこの幻想郷で復活してからまだ半年以上しかたっていない。未練がましいといえれば否定は出来ない。そして、嘗ての過去の自分が目に浮かんだ。

妖術の力を得るために妖怪退治をし、死という恐怖から逃れるために妖怪を助けた愚かだった自分。それが祟つて人間に疎まれ、封印された。

今思うと、己の愚行で恥情がどつと湧き出た。その湧き出た恥情が顔を火照らす。その火照った気持ちで落ち着かせるように首を振った。夜空を見上げながら白蓮は星に語りかけた。

「思えば、今までは寿命が延びたぐらいで、何も得たものは無かったわね。今本当にそう思うわ」

「本当にそうでしょうか？」

星が耳元で言った。

「もし、聖が妖怪退治として生業をしていなければ、私と聖が会うことも無かったでしょう。それに貴女が犯した罪はただの償いとして終わるのではなく、『妖怪としての聖』の再出発だと思います。だからこそ聖はここで年を明かすことが出来、ここに住む妖怪たちを見届けることが出来るのです」

白蓮はふふつと笑うと、口元を緩ませて、星に向かっていった。

「そうね。あのことがあったからこそ、星がここにいる。そして私がかここにいる。今こうして平和な年越しの夜空を迎える幸せを享受しないかね」

「ですね」

二人は見つめあい、笑った。

いつの間にか除夜の鐘が鳴り響き、星が散りばめられている夜空に広がった。もう、年が明けた。星はその鐘を聞きながら思いついたように白蓮にたずねた。

「そういえば聖は新年のお願い、何にするんですか？」

「新年のお願い……ねえ。正直ありきたりな願いは必要なさそうね。

この世界では」

「ありきたりな願い。『何事も無く平和で健康に暮らせますように』みたいな感じですか？」

「まあ、それは基本として、その上で個人的な願いを今年願おうかなって思いついて」

「個人的な願い……。案外聖も欲張りですね」

「ふふっ。そうかしら？」

お互い笑い合うと、白蓮は部屋の炬燵に入った。星も入った。そこにはありきたりな蜜柑が置かれていた。皮を剥きながら白蓮を星に願いのことを話し出す。

「私の願い。聞きたい？」

剥かれた蜜柑を口に放り込む。蜜柑の皮の白い部分を取り除きながら星は答えた。

「そうですね。気になりますね。何でしょうか？」

星は白い部分だけでなく果肉の薄皮まで剥がしてしまっている。白蓮はそれを見て「あちゃっ」と小さく呟くと、笑顔で言った。

「私ね、『メイドさん』になれますようにってお願いしたの」「へっ!?!」

星は思わず蜜柑を指でつぶしてしまった。白蓮はまた『あちゃっ』と小さく呟いた。

## 冒頭（後書き）

どうも、ZIRANです。また東方です（苦笑）

初めての連載モノなので、ちょっと緊張するところもありますが、頑張ります。

更新頻度がマチマチに成ると思うので、そこはごう承を。

白蓮がメイドやったら面白いだろうなー、と思い始めたのがきっかけです。

続くかどうかちょっと不安なところもありますが、どうぞ、よろしくお願いします。

## 決定

元旦の命蓮寺

「……というわけです。皆さんは如何と思えますか」

炬燵に入りながら星は言った。炬燵には星のほかに村紗水蜜、雲居一輪も同席していた。二人とも苦笑混じりの困惑した表情だった。一輪は半信半疑で星に訊く。

「星、本当に姐さんが言ったのですか？」

星は黙って頷いた。一輪は顔を手で覆って、大きくため息をついた。元旦というめでたい日なのに、命蓮寺の雰囲気は若干の沈鬱が漂っていた。何故、こうも沈鬱か。それは大晦日に白蓮が言った一言の所為だった。それは、「メイドになる」ということだった。

「果たしてあの人にできるのかなあ……」

水蜜は気だるそうに天井を見上げながら最後の蜜柑のかけらを口に放り込む。

「そりゃ、メイドってのはパツと見、独特の可愛らしさっていうの？　そういうはあるけどサ」

水蜜は皮だけになった蜜柑をゴミ箱に投げ捨てる。皮はゴミ箱にすっぽり入った。一輪は小さく「ホールインワン」と呟いた。それを聞いた水蜜は一輪にいたずらっぽく舌を出して一瞥した。この二人は白蓮の告白をあまり重要と思ってなさそうだ。もちろん星はそんな二人の思いなんぞ気づいちゃいない。二人の些細なやり取りに、星はお構いなしで話し続ける。

「冗談で終るといいんですけどね……」

一輪、水蜜は黙って頷く。が、どうせ冗談に決まってるさ、本気だった本気でそれでまあ……しばらくは好きにさせるか、と二人は頷きながら思っていた。だが、星は深刻に考えていた。冗談だとは思いつけれども、本気だったらどう説得させればいいのか。星はとも不安だった。正直な話、星自身も『メイド』というモノにイマイチ理解できていない部分もある。そのため説得させようにもなかなかいい材料が見つからない。星はただ、冗談で終って欲しいと思っただけだった。

すると水蜜はふと何かに気づいたのか、星にたずねた。

「そういえば白蓮様見かけないね。まだ寝てるのかな？」

「そんなこと無いわ。姐さん早起きな人だから……」

星は嫌な予感がした。時間ではもう10時ぐらいを回っているのに今だみんなの前に姿を見せない。もしやと思って立ち上がるうとしたとき

「ひゃあうー!!」

星は飛び上がって炬燵から出た。水蜜、一輪は驚き啞然としていると、星の座っていた炬燵の毛布からモゾモゾと何かが動いた。

「な……なんですか……」

星は冷や汗を流しながら言った。そして驚きと一抹の恐怖で震える手をそつとモゾモゾ動く毛布を捲り上げようとしたとき

「きゃっ!!」

また大声を上げた。このとき水蜜と一輪は「ビビりすぎ」と言わんばかりに目を合わせ、ふう、と息をついた。毛布から顔を出したのは、星の部下兼監視役のナズーリンだった。星はナズーリンと分かるかと安心し、ほっと大きく息をついた。

「なんだ……ナズーリンでしたか……。もう……脅かさないでくださいよお」

ナズーリンはいたずらっぽく微笑みながら星に言った

「ははは。これは失礼したご主人。あまりに炬燵が暖かくてずっと籠もっていたよ。それと、ご主人。虎柄のパンツとは、相変わらず縁起の良い人だな」

「……えっ」

水蜜、一輪も思わず声を上げて言った。外で冷たい風が吹いた。周囲は恐ろしい静寂に包まれた。まさか……私のも見られたのでは……。そんな水蜜と一輪の疑いの目がナズーリンに一気に集中した。慌ててナズーリンは話題を逸らした。

「そ、それよりもご主人。白蓮様のことについてだが……」

「知っているんですか!？」

「ああ。私の鼠が寺から出て行く白蓮様を見たと言っている」

「寺から出て行く!？ まさか……」

星の不安はさらに膨れ上がった。だが、一輪、水蜜そこまで深刻そうな顔はしていない。

どうせ、ただの散歩だろう、と軽く思っているからだ。

「どこへ向かったか分かりますか!？」

「目標は分からないが、湖のあるほうへ行ったのじゃないかと思う。」

ここを出てからだいぶ時間が経つから、早いところ行かないと

「

ナズーリンが話し終えぬうちに星は居なくなっていた。ナズーリンはふう、とため息をつく、また炬燵の中に入っていった。水蜜は慌てて出て行った星に対してこう皮肉った。

「やれやれ。家は年中師走だ……」

「まずい……本気だよ、あの人……」

ずっとそんなことを呟きながら星は空を飛んでいた。湖を頼りに、全速力で飛んでいると、目的の湖が見えてきた。その隣には怪しげに湖畔に立つ紅い屋敷があった。

「あれだ！」

すぐさま星は地上へ降下した。  
着地をするとすぐに辺りを見回した。そこには見覚えのある長い  
髪の人物が館の前で立っていた。

「聖！」

星は叫んだ。するとその声に気づき、白蓮は振り向いた。手には  
紙を持っていた。星は白蓮の元へ駆けつけると、手を強く握った。  
そして目を見開いて白蓮に言う。

「聖！　すぐに帰りましょう！」

だが、白蓮は

「ええー。星堅いなあー」

「堅いとかそういう問題じゃありません！　兎に角、今すぐ命蓮寺  
に帰りましょう！　みんな貴女がメイドになるということを心配し  
ているんですよ！？」

「そうなの？」

ちなみに心配しているのは星だけである。もちろん星は気づいて  
ない。

素っ頓狂な返事に星は力が抜けるが、それでも、白蓮を寺へ帰そ

うと必死で説得を続けようとする。すると、白蓮は手に持っている紙を星に見せた。

「これ、何の紙かわかる？」

「ん？ 『メイドになりたい頼もしい人募集中。志願者は紅魔館メイド長、十六夜咲夜に連絡を』」

「どう？ 去年じゃいろいろ忙しかったからなかなかいけなかったけど、まあ、年も明けたことだし、新しい自分の発見として志願してみたの！」

「い……いつからそう思い出したんですか？」

白蓮は考えるように人差し指を口元に立てる。そして子供のような純粋な笑みを浮かべ、陽気な口調で答えた。

「そうね、去年の秋ぐらいかしら？」

そんな前から思っていたのか……。今に始まったことでないのか  
と思い、星はがっくりと頭を落とす。すると白蓮は星の手をとり、  
歩き出した。

「な、なんですか？」

「ん？ なんなら星も一緒にメイドさんをやらせようかなくて」

「はいいい！？ い、今なんて？」

白蓮は振り向き、人差し指を立てながら星に迫る。

「だ・か・ら！ 星と一緒にメイドさんやらせようか言って言ったの。星も結構似合うと思うけどね、メイドさんの服」

「あの……聖……。そろそろふざけるのも　　ん？」

星は何かを見つけたようだ。白蓮も星に合わせて振り向くと、そこに人が倒れていた。すぐさま二人は駆け付けると、中華服に人民帽を被った少女が倒れていた。星はその少女を抱きかかえ、声をかけた。

「大丈夫ですか！？」

少女は顔に血糊がついており、数本、体にナイフが刺さっている。白蓮は冷静に法術で少女の傷を癒す。

「なんとという傷だ……。一体誰が……」

「『それ』にかまう必要はありません」

「「！？」」

突然の聞かない声に二人は驚いて顔を上げた。そこには、いつの間にか白蓮たちのすぐそばにたっているメイドがいた。腕を組み、両手にはナイフが太陽の光を受けてキラリと鋭く光っている。星はその風体に一瞬背筋が凍った。こいつは只者ではない。と星は悟っ

たのдарろつ。

「お客様ですね。私の名前は十六夜咲夜。ここのメイド長を勤めて  
いる身の者です」

「メ、メイド!?!」

白蓮は思わず声を上げた。星は頭を落とした。メイドと聞いてデ  
ンションの上がる白蓮に構わず、咲夜は語りかけるように静かで確  
かな口調で話し続ける。

「ええ、メイドですわ。そのビラ、多分募集を見てくれたお方です  
ね」

「はい! そうです! ちょっと今年からメイドさんっていうの体  
験したくて」

「そうですか。なりたいたいという思いを持っている方が、志願される  
ことはこちらとしても大変喜ばしいことです。ただ……」

咲夜は急に顔を暗くする。

「ただ?」

「この募集広告、もう期限とっくに切れているんですよ」

「へ?」

白蓮は固まった。ビラの握っている部分がくしゃりとつぶれる。

後ろから星が読み上げた。

「えーっ……と、この募集の期限は2009年11月25日までとします。それ以降の募集は、受け付けません……って、コレ去年までの募集じゃないですか!？」

星は白蓮のほうを向いた。白蓮は握った部分がくしゃくしゃになっているビラを見つめたままだった。星はため息をつきながら思った。ボケすぎだ、と。だが、星は同時に安堵した。結果オーライであるが無事に事が済みそうだからだ。星は安堵の表情を見せながら白蓮に向かって語りかけた。

「さ、これで無理という話だと分かったことですし、寺に帰りましょう。みんな心配してますし。ね？」

「……………」

白蓮は握られていたビラをくしゃくしゃに丸めて地面に捨てた。腑に落ちない顔で星に続いて寺に帰ろうとした。

「十六夜咲夜さん……でしたね？ 私の主がご迷惑おかけしました。では、失礼します」

星は申し訳なさそうに咲夜に向かって一礼した。その顔はどこか安心したような表情に見えた。そして白蓮を連れて飛んでいった。

連れられる白蓮は物惜しげな顔で紅魔館を見つめていた。

咲夜は丸まったピラを拾い、紙面を見た。そこには期限が記された場所に赤丸で囲まれていた。すると咲夜はポケットからタロットカードを手に取ると、何か呟いた。

「時よ……止まれ」

辺りは一瞬で静寂に包まれ、周囲は灰色に染まった。咲夜は遠ざかった星たちを追いかけた。物惜しげに紅魔館を見つめていた白蓮の瞳には、僅かな涙で光っていたのを、咲夜は気づいた。咲夜はふふつ、と鼻で笑い、そつと囁いた。

「純粹なお方ね……」

そう呟くと、星の目の前に立ち、再びタロットカードを取り出して呟いた。

「そして……時は動き出す」

灰色の世界が再び色を取り戻した。

「えっ！？ わわわ！」

星は突然現れた咲夜に驚き、急停止した。白蓮も星の反応に驚いて前を向いた。いつの間にか姿を現したさっきのメイド長、十六夜咲夜の姿に目を丸くした。

「な、なんですか！？ いきなり現れて！ 危ないじゃないですか！ それにいつの間にもここへ……」

「そのことに関しては後で。私は先程の件についてお話があります」

「これ以上貴女に用はありません」

「貴女じゃありませんわ。私はその後ろのお方にお話があるんです。もし、これ以上邪魔をするようなのであれば……」

すると咲夜は両手から合わせて十本以上もいくようなナイフを見びらかした。どのナイフも、簡単に人を貫けそうな鋭い光を放っている。星も臨戦態勢に構えようとしたが、不殺生を基本とする白蓮の信念に背くと思いい、こらえた。咲夜はにこつと微笑んだ。

「随分と話が分かる妖怪ですわね。さて……聖さん……といいましたか？」

「？」

白蓮は咲夜のほうをむく。咲夜は穏やかな顔で、小さな子供に言い聞かせるような優しい喋り方で白蓮に語りかける。

「せっかく館まで足を運んでくださいましたし、なにしろ募集広告

を掲げてもメイド志願者が集まらなかったものですから、どうせなら短期間だけでも……」  
「えっ!?!」

白蓮は目を丸くした。咲夜は何も言わず、微笑みながら頷いた。

「あ……ありがとうございます!」

満面の笑みを顔いっぱいに出して、白蓮は精一杯の感謝を言った。だが、星は再び、いやそれ以上の不安がのしかかり、思わしくない表情を見せた。

咲夜は口調を変えて、紅魔館へ先導しはじめた。

「では明日から1週間、紅魔館でメイドとして働いてもらおうね。朝は早いから、今日は館に泊まっていきなさい」

ま……まずいことになった……。早く何とかしないと……。ああ……助けてナズーリン……。  
星は心の中でナズーリンに助けを求めながら、紅魔館へと向かった。

結局星は白蓮を説得できず、寺に他のものを残したまま、白蓮とともにご奉仕する羽目になった。

「へっぶしっ！」

炬燵の中でナズーリンはくしゃみした。

「誰か噂してるね、きっと」

雑煮を食べながら、水蜜はナズーリンを茶化した。ナズーリンは顔を出しながら水蜜に

「噂じゃなくて、ご主人の救援信号だろう」

と皮肉った。水蜜は餅を加え、びろーんと箸で伸ばしながら言った。

「まあ、あり得るわね」

二人は笑った。

- 続 -

## 決定（後書き）

二話目突入です。しかし白蓮のキャラが崩壊しすぎたのに自分自身でもびっくり。ちょっとしぐさとか若すぎた。ヌーン。あとみんな星の扱いが適当なのもびっくり。みんな冷静すぎだ。あと星、いろいろ気づけ。

そんなわけで次回からついにメイドの白蓮と星が出てきます。次回ご期待を。  
では。

## 相反

紅魔館にて

「見かけによらず、随分と広いんですね」

陽気な声で白蓮はぐるりと辺りを見回した。

「まあ、これぐらい、空間を少しだけ弄れば簡単よ」

「空間……ですか。私にも出来たらいいですね」

二人はふふつと笑いながら奥へと進む。しかし一人だけ乗り気じやない者がいた。星である。白蓮を説得し、寺に連れ戻すことができず、拳句の果てには自分までメイドをさせられる羽目に。星は己の不甲斐なさに沈鬱な表情を滲み出していた。

どんと奥へ歩む白蓮。重々しく歩む星。この対照的な二人の様子を後ろ目で見ていた咲夜は滑稽だった。あまりにはつきりと表情を顕にしている二人は、純粋な子供にも見えたから。

咲夜は大きな扉の前で立ち止まった。

「この先には館の主、レミリア・スカーレットがいらっしやるわ。たいそう我儘で、心が幼稚な方だから、くれぐれも失礼の無いように。もしも、あった場合は例えあなた達のような手練れの妖怪でも容赦ないわ。気をつけてね」

「あら、お気遣いどうも」  
「心が幼稚で、我儘なんて……。主人に対して、なかなかのことを言いますね」

星がヒヤヒヤした表情で言うと咲夜ははっきりと言った。

「メイドですから」

「「？」」

白蓮、星の二人は顔を見合わせてハテナマークを浮かばせた。  
咲夜は軽く服を整えると、扉に軽くノックした。

「失礼します」

「入りなさい」

奥から少女の返事が聞こえた。咲夜は静かに扉を開けると、そこには広い部屋が広がっていた。カーペットやテーブル、天井、カーテンなど様々な家具が紅色に染まっており、天井に吊り下げられているシャンデリアも仄かに紅の光を放っている。まさに赤の広場と言っても相違ない風景だった。

その長いテーブルの奥で一人ちよこんと椅子に座っている少女がいた。少女はティーカップに注がれている紅茶を一口啜った。

「あら、初見の客がいるわね」

「この二人は先程メイド志願のために来られた方です。レミリアお嬢様」

レミリアお嬢様と呼ばれた少女はティーカップを置くと、驚いた。

「メイド志願？」

「ええ」

するとレミリアは嘲笑するように「ふっ」と鼻で笑うと、頼杖をついた。

「今更メイド志願ね……。もうとっくのとうに期限は切れてるわよ、咲夜」

「ええ、切れてますわ。だから雇いました。安心してください」

「どういうこと？ それに安心するって……」

「簡単申せば、期限が切れているからこそ使える人材なのです。募集をきっかけに来たものは玉石混淆。軽い気持ちで入る者も多々いるわけです。かえって切れている時に来たものほど意志は強く、使い甲斐があるので」

「なるほどねえ……」と頼杖をつきながらレミリアはまた紅茶を啜った。

「で、安心する意味は」

「ええ、安心するのは、終身雇用じゃないところです」  
「ふむ……そう」

咲夜が話し続ける中、レミリアはちらりと目を咲夜の背後に遣った。どちらも人間とは思いきい風貌だった。特に目が行ったのが、咲夜のすぐ後ろに佇む白蓮だった。非常に強い魔力を感じたからだ。

(要注意ね……下手に近くに置かせないほうが無難……か)

レミリアはまた紅茶を啜った。そんなレミリアの視線に気づいたのが、白蓮はふとレミリアのほうを向いた。レミリアは帽子を下に引っ張って顔を隠していた。

(シャイなのね……ふふっ。かわいい)

白蓮の顔が綻んだ。お互い対称的な第一印象だった。

「……………というわけです。なのでしばらくよろしくお願いしますお嬢様。……………お嬢様？」

レミリアはまだ帽子で顔を隠していた。咲夜はそっと近づき、囁いた。

「……ガードの必要は無いと思いますが」

レミリアはすぐに帽子を取ると、頬を膨らませながら咲夜に

「あるわよ!」

と言った。白蓮はそんなレミリアを見ながらずっと微笑んでいた。しかし、星は思わしくない表情だった。なぜなら、レミリアが白蓮を警戒の目で見つめていたのに気づいており、感じていたからだ。星は心配して、白蓮に耳だてた。

「聖、この主の館、貴女のことを警戒しているようですよ?」

「あら、そうかしら?」

拍子抜けな白蓮の返事に星は頭を思いつきり掻きまろうとしたが、こらえた。

「聖も分かっているでしょう? 彼女は、貴女の力を恐れ、警戒心を抱いていることを」

「警戒、ね……」

星の言葉を白蓮は復唱した。そしてすぐにまた顔を綻ばせると、

星に向かって一言言った。

「きつとシャイなのよ」

期待はずれの回答に星はついに頭を掻き毟ってしまった。

咲夜に連れられて、白蓮一行は個室へと案内されていた。白蓮は相変わらず浮き浮きな様子で見慣れない様式の廊下を見ながら、星はもはや何も喋らずに歩いてた。

そんな対照的な二人を連れて、一行は目的の部屋に到着した。紅い扉が二つあった。

「明日から住み込みで一週間働いてもらうから、今晚からこの部屋に泊まりなさい」

「本当に個室ですね」

白蓮は相変わらず微笑みながら言う。だが、穏やかさと言うより

は、歡喜に近い微笑だった。

「とりあえず、明日からは始めるから、今日のうちに服の着こなし方とかは覚えておいて。分からなかったら、近くの妖精メイドに聞くか、私に聞いて」

「ついにメイドさんの服かー」

咲夜の話によそに、白蓮は憧れのメイド服が着れることに喜び、自分の世界に浸っていた。そんな白蓮の様子を見ていた咲夜はポンツと肩を叩いて、囁いた。

「そうやって、夢見られるのも今のうち。明日になれば、そんな夢も儚く消えていくわ」

咲夜は微笑を浮かべるとポケットから鍵を取り出して、二人に渡した。

「これが、個室の鍵。この部屋の中の私有物の責任は一切取れないから、自己管理を徹底してね。まあ、言われなくても、あなたたち妖怪に言う必要はないとは思っけれども……」

「約一名は、ちょっと心配ですけどね」

白蓮は星のほうを向いた。星は白蓮の袖に掴まって、焦りながら弁解した。

「そっ、それはっ、ナズーリンがいるからああいう風になってしま  
うわけで……。い、居なかったら、もも、もっとしっかりしてます  
っ  
っ

「へえーっ。さっきここに向かうときに、別の階段上ろうと間違え  
たのは、どこの虎でしたっけ？」

「ひっ、聖っ！ 何時の間にそんなことをっ！」

「ふっふーん。見なくてもいいのに見えてしまっつてやつですよっ

「聖っ」

「ほらほら、ベソをかこうとしないのっ。毘沙門天様が落胆するわ  
っよ

「だっ、誰のせいであんなっ」

そのとき、あたりは一瞬に灰色に染まった。二人のやり取りの時  
間も硬直した。咲夜だけが、自分自身の色を持っていた。咲夜は、  
時を止めていた。咲夜は頭を抱えながら思った。

何度見ただろっか、この応酬。

強いデジャヴを感じながら、するりと銀のナイフを二本取り出す  
と、二人の額にめがけて投げ飛ばした。ナイフはそれぞれの額スレ  
スレの位置まで動き、止まった。咲夜は懐中時計を手に取ると、二  
人に向かって言った。

「落ち着け」

そして、停止した世界は動き出し、二人はナイフを直撃して倒れ

た。

額からドクドクと血を流しながら、互いに気を失っている白蓮と星を見つめながら咲夜は呆れるように言った。

「やれやれだわ……」

その日の夜、白蓮と星はそれぞれの部屋で夜を明かそうとしていた。星は部屋の鏡の前で、包帯が巻かれた額を擦っていた。手加減で喰らったとはいえ、ナイフに刺されたから当然痛い。し、まだ痛み。血はもう流れなくなったが、それでも痛い。星は額の僅かな痛みを感じながら、白蓮を連れ戻せなかった今日の自分に強く後悔していた。ベッドに横たわると、星は親指の爪を噛んだ。

一方白蓮は、クローゼットに入っているメイド服を終始眺めていた。これが自分の着るメイド服を考えると、忘れていた子供の頃の無邪気な興奮が収まらない。その表われか、白蓮はいつもと違う優しい微笑ではなく、子供の笑顔になっていた。

ベッドに座り込み、隣の部屋のほうに向くと、何かに気がついたか、少し興奮が冷めた。隣の部屋に居る、自分のことを心配している星のことを思ったからだ。

星は連れ戻すためとはいえ、ついてきた。そして、星の不本意の

ままメイドの仕事に従軍させてしまった。自分のことを考えていた星の気遣いを考えると、今までそれに無頓着だった子供の自分に強い羞恥心がこみ上げた。すると白蓮はクローゼットの扉を閉めて、おもむろに髪を整えるとベッドに横たわった。白蓮はなんともいないその羞恥心と自責の念を抱きながら、小さな声で言った。

「ごめんね……」

- 続 -

## 相反（後書き）

えらい時間が空いてしまいました。ZIRANです。

この間に風邪を引いたり、軽い鬱が断片的にきたりして、なかなか進みませんでした。

なんというか、白蓮のキャラ崩壊が加速するな……。正直自分も怖いところですよw

あと一番やってて難しいのが、二文字の題名を決めるのと、あとがきを書くことですなw

一日目 燭台（前書き）

こうして初仕事の日を迎えた二人だが……

## 一日目 燭台

一日目

さわやかな明るい日差しが差し込む。レースのカーテン越しから  
さんさんと降り注いでくる。

その光は、ベッドの上で眠る星を当てた。星はその光に目を覚ます。  
ベッドのシーツがぐしゃぐしゃだった。いつも寝る布団でも、掛け  
布団はぐしゃぐしゃにならないのに、今日に限って、シーツなど諸  
々がぐしゃぐしゃだった。

「寝つき……悪かったな……」

重い瞼を微かに開きながら、ポツリと呟く。ゆっくりとベッドか  
ら降りようとした。だが、そのとき何のはずみでバランスを崩した。

「ふわぁっ!?!」

床に向かってうつむきに倒れ、そのまま思いつきり顔面を打ちつ  
けた。哀れ星。

「ぶぐぐ……」

目を瞑り、あえぎ声を上げる。そして、痛みに堪えながらゆっくりと顔を上げる。

「……これくらいのこと……。ナズーリンに毒吐かれるよりマシ……」

そう言つと鼻をすりすりと擦る。

「むしろ、ナズーリンに毒吐かれるほうが……」

想起してしまったのか、星はぐすつと鼻をすすった。目じりから僅かな涙が光る。そしてがっくりと頭を落とした。そんな頃垂れる星の耳に白蓮の声が聞こえた。ふと廊下のほうへ向いて、廊下の声を聞こう扉に近づいた……。そのとき。

「星ー！？ 時間ですよ！」

白蓮は扉を思いっきり開いた。勢いで蝶番が壊れそうなくらいだ。

「星？ まだ寝てるんですか？ 早くしないと……ん？」

ふと足元を見ると星が仰向けになって倒れている。両手を大きくおっぴろげ、目をくるくる回しながら、間の抜けた唸り声を上げている。

「あら……ごめんなさい星！ そんなところにいたなんて……」

申し訳なさそうに白蓮は星を抱きかかえると、打ち所であろう赤くなった額の痣を優しく擦った。

「っあう！…！」

「きゃっ！…！」

星は突然意識を取り戻した。それと同時に白蓮も思わず声を上げてしまった。星は痛そうに額の痣をさすりながら、起き上がる。

「ついてて……。ひ、聖どうしたのですか？」

「えっ、どうしたって、時間になったから……」

すると二人は目が合った。お互い鼻と鼻がぎりぎり触れ合うくらい近く、二人とも顔が火照った。そしてすぐに二人は目を逸らした。白蓮が気まずそうに喋る。

「ね、ねえ星？ ほら、時間って言ってもさ、『ああいっ』時間じゃないのよ？ それってわかってるわよ……ね？ だからさ、そんなに照れなくても……」

星も同じく目を逸らして、戸惑いながら口を動かす。

「そ、それはもちろん分かってますよ、聖。ただ、そ、そうやってわざわざ解釈しなくてもいいと思いますよ？ で、でもそんな聖のことが嫌いだからって、そういうことじゃ……ないです……よ？」

「あ・な・た・た・ち」

「はっ……」

二人は一瞬に顔を青ざめた。同時にゆっくりと振り向くと、何時の間に現れたか、咲夜が居た。両手に銀のナイフをちらつかせ、今にも投げてきそうな勢いである。

「就業時間はとくに過ぎているわ。タダでさえ忙しくて暇がないのに、あなたたちときたら……悠長にイチャついてるわね」

「う……えっと……その……」

流石の白蓮も咲夜の勢いに押され、たじたじになっている。

「まずは、虎のほうはさっさと着替えなさい。聖さん、あなたには仕事があるからさっさと来なさい」

咲夜はおもむろに白蓮の首を掴むと、ずるずると引っ張り出した。  
星はあっけにとられたままだった。

「あの一……」

「なるぞ……」

「あの一……」

「なるぞ……」

「あのオ……」

「何？」

「私、歩けます」

「そう」

咲夜は白蓮の困った顔に見向きもせず、廊下をずっと引つ張っていた。

「あ、階段だわ」

「へっ!?!」

白蓮は引つ張られながらおもむろに振り向く。平坦な道が消えている。下り階段だ。白蓮はそれを見て青ざめる。

「ちょっと、い……いくらなんでもそんなことしませんよね!?!」

「さあ……どうかしらね」

咲夜は不敵に微笑んだ。白蓮はその微笑を見ると小さく呟いた。

「南無三」

そのまま白蓮は階段に打ち付けられながら下っていた。正に南無三。そして、散々引きずられた後、大きな扉の前に到着した。

「ここが今日からあなたの持ち場よ」

「はっ……」

白蓮は所々打った場所を擦っている。

「それくらいのことでは、体が幾つあっても足りやしないわ」

「そんなにも……修羅場なんですか。イテテ」

すね辺りをまだ痛そうに擦りながら白蓮は言った。

「どの世界でも修羅場というのは存在しているわ。それは、あなた自身もよく分かっていると思ってるけど」

咲夜は白蓮を見下ろしながら言った。

「大体合ってますけど、修羅場でもそれぞれ訳の違う修羅場なのだと思いますよ」

ようやく痛みが引いたのか、ゆっくりと立ち上がりながら白蓮は言った。咲夜はふっ、と鼻で笑った。

「そうなのね……。まあ、ちょっと聞いてみたかっただけ。深い意味なんて無いわ」

「そうですね」

「さて、雑談はここまでにして。仕事を説明するわ」

そう言うと咲夜は白蓮の目の前に立った。そして、腕を組みながら口を開いた。

「さつきも言ったように今日から一週間、この図書館での仕事よ。といってももしかしたらシフトの組み直しで一週間じゃなくなるかもしれないからそこは注意して頂戴」

「図書館だったのですか、大きい扉……」

白蓮はもの珍しそうに扉を見上げる。

咲夜は咳き込んで、話し続ける。

「仕事の内容に関しては、司書がいるからその子に聞いて。司書が頼みごと無かったら、掃除とか雑用適当に済ましておいて」  
「わかりました」

白蓮が返事をした後、咲夜は胸元から数枚のカードを取り出した。トランプカードのようだ。

咲夜はカードを手に取りながら白蓮に言った。

「じゃあ、夜になったら呼びに来るわね。昼食は自分で何とかして頂戴。じゃあ、これで失礼するわ」

カードを放り投げると、咲夜の体が一瞬二重にブレたかと思ったら、すぐにその姿は跡形も無く消えた。残った白蓮は、落ちたトランプカードを拾い上げてふと呟いた。

「これで瞬間移動してるのかしら？ 人間なのに凄いわね」

ジョーカーが描かれているカードとスペードのエースのカードをエプロンのポケットに仕舞い込んで、白蓮は図書館に入ってしまった。

ゆっくりと扉を開けると、中は意外と薄暗い。図書館の所々に燭台が設置されているが、照明というには暗すぎた。燭台の炎で仄かに照らされている所に埃が漂う様子がゆらゆらと映し出されている。そんな薄暗い周囲を見上げながら白蓮は終始図書館の広さに圧巻されていた。白蓮の想像していた図書館とは全くスケールが違っていた。特に、高層建築物のように高く、そして規則正しく並ぶ本棚たちには啞然となって驚くしかなかった。

「こんなにも本があると、一冊ぐらい盗ってもバレなさそうね」

白蓮は子供のよ様な笑みを浮かべながら軽い冗談を言った。

「さて、司書を探しますか。……どこにいるんだろう？」

白蓮は辺りを見回した。司書本人は見つけられなかったが、それが居たと思われるのを発見した。それは受付のテーブルだった。その受付のテーブルには赤い髪をし、頭には羽のようなものを生やしている少女が、顔を半分だけだして白蓮を見ていた。不思議に思った白蓮はテーブルに近づくと、その少女と目が合った。少女は目が合うと顔をすばやくテーブルの下に引っ込めた。

「え？ なに？」

あまりに早い動きだったせいで、白蓮は一瞬何が起きたか理解できなかった。だが、またあの少女がテーブルの下から顔を半分出し始めた。白蓮はその少女の様子を見て、彼女は人見知りなのだと思っ

白蓮は微笑みながらその少女に語りかける。

「こんにちは。私は聖白蓮と申します。あなたは？」

優しく語り掛ける白蓮を見て、少女は少し困惑した表情を見せた。表情といっても、目からは見えぬ。だが、目を照れくさそうに泳がせているのは分かった。

「人見知りなんですね。多分見慣れない人が来たからだと思いますよ。私は昨日雇われた新人のメイドです」

「メ……メイドですか」

小鳥が鳴くような小さな声で少女は言った。白蓮は穏やかな表情で頷く。

すると少女はメイドと聞いて少し安心したが、ゆっくりとテーブルから出てきた。

「もしかして、ここの図書館の司書さんですか？」

「はい」

少女は上目遣いで応えた。

「よかった。先程メイド長に仕事を司書に聞いて来いと言われてきたので、図書館に入ってみたら、これがまた想像以上に広いものとして。司書を探す前に、私が探される羽目になってしまつところでしたよ」

周囲を見上げながら白蓮は言う。少女は少し申し訳なさそうな表情だった。

「でも、安心しました。司書のあなたが、こんなにもすぐ近くにいるのが分かって」

菩薩のように心が救われるような表情で白蓮は言った。その顔を見て少女は少々こわばった表情でにこりと微笑む。

「そういえばあなたのお名前を伺ってませんね」  
「名前、ですか」

少女は困ったような表情をした。

「どうしたのですか？」  
「ええっと。私は……」

少女は少し言葉が詰まった。何かを考えている様子だった。ちらりちらりと白蓮のほうに視線を向けながら親指をくわえている。白蓮はその様子に首を傾げたが、あえて何も聞かなかった。少女は白蓮に向かって言った。

「小悪魔ですっ」

「『小悪魔』……ですか」

名前とは思えにくい名前に違和感を白蓮は感じずには居られなかった。

「いい名前ですね。女の子らしい名前ですよ」

そう言って白蓮は笑顔で頷いた。

「早速ですけど小悪魔さん、何か手伝って欲しいことはありますか？」

そう言われると小悪魔は弾かれたように驚いて振り向いた。

「あっ、すみません。急に馴れ馴れしく話しかけて……」

白蓮は申し訳なさそうに頭を下げた。小悪魔はなだめるように白蓮に向かって言った。

「い、いえ。こっちこそ、急に驚いたりしてすみません。ちょっと人見知りか激しいので、どうしてもビックリしてしまうんです……」

「そ、そんな……。驚くことに何も悪いことはありません。私ともう少し、丁寧に接すればこんなことには……」  
「いつになっただらその応酬が終わるの？」

奥から少女の声が響いた。その声は、繊細で、少しひ弱そうなものだった。二人は声のしたほうに振り向くと、その声の主である少女が燭台の光でぼんやりと立っている。

「ここにも他の司書がいるのですか？」

白蓮は小悪魔に尋ねる。

「司書は私だけです。あの人はここで住み込みで魔法の勉強をしているパチュリー・ノーレッジ様です」

パチュリーと呼ばれた少女はゆっくりとした足取りで白蓮たちに近づいてきた。パチュリーは白蓮の目の前で立ち止まった。そして目を細めて白蓮の顔をまじまじと見始める。それは互いの顔が擦れるくらいまで近くで。

パチュリーは白蓮を見るのをやめると、小悪魔に向かって聞いてきた。

「見慣れない顔ね。この人は誰なの？」

「あつ、はい。この人は、先日メイド長に雇われた人だそうです」

「名前は？」

「はいっ。えっと……」

「聖白蓮と申します」

小悪魔が詰まった瞬間に白蓮は名乗りを上げた。

「そ、そう……」

少したじろぎながらパチュリーは言った。するとパチュリーは辞書のような分厚い本を胸まで持ち上げると、軽く叩きながらしゃべり始めた。

「全く……咲夜も変わってるわね。まだあの募集ポスター出したのかしら？ ……てなるとあなたはもしかして

「はい！ その『もしかして』です」

「やっぱりな」と言わんばかりの表情を湛えながら、パチュリーは鼻で軽く笑った。

「で、あなたは咲夜からここに派遣されたわけね」

「咲夜……。ああ！ メイド長ですね！ はい、そうです！」

「返事の良い奴……」と心の中でつぶやいたパチュリーだった。

パチュリーはふと、白蓮に目をやると、白蓮は微笑んでいた。しかし、その微笑からは少なからず、『早く仕事をくれ』という要求を感じ取れた。

「悪いけど、ウチはメイドを遣わされるほど、手一杯じゃなくてね」

パチュリーはため息をついていった。その顔はうすら笑っていた。大仰に「やれやれ」の仕草を演じながらパチュリーは話し続ける。

「確かにこの図書館は広い。なんせ幻想郷にある書物だけじゃない、外の世界の本までもがこの図書館にいっぱい詰まっているのよ。できれば咲夜のような優秀で聞き分けの良いメイドでこの部屋を掃除して欲しいのだけだね。

どうもこの紅魔館にいる妖精メイドたちは、てんで言うことは聞かないわ、悪戯はするわで、返って大切な書物が壊されるかもしれないのよ」

ゆっくりと呼吸を整えなおして、再びしゃべり始める。

「そりゃ、あなたみたいに育ちの良さそうなメイドが来てくれれば、少なからず役立たずの妖精メイドよりは有用かもしれないわ。

けれど、私はもう100年近くはこの図書館で過ごしているし、逆にこの書物を整理されたりすると、慣れてないってするので、返って私にとっては不便になるのよ。第一この図書館を『正しく』利用するのは私ぐらいだし」

白蓮は『正しく利用する』という言葉が妙に引つかかったが、あえて何も突っ込まず、そのままパチュリーの話を聞き続けた。パチュリーは少し息苦しそうに再び呼吸を整えると、またしゃべりだした。

「と、いうわけよ。せつかくあなたに来てもらって悪いけど、あなたの出番はナシってハナシよ」

するとパチュリーは白蓮の額を指さわりながら一言。

「記憶した？」

つつつ、と白蓮の額をつついた。「はうつつ」と白蓮は声を上げた。白蓮はつつかれた額を触りながらパチュリーに言う。

「でも、私、夕餉までは仕事しないと。お昼は自分で調達しないと駄目だし……」

「だからって、私がここで無駄に居座らせるわけ？」

そう迫られて、白蓮は返答に困った。

「あ、あのパチュリー様！」

すると小悪魔が割って入ってきた。パチュリーは少し驚いていた。

「な、なによ」

小悪魔は少し恥ずかしそうに指をいじいじしながらパチュリーに言った。

「あ、あの、せっかくこうやって新しいメイドさんが来てくれたんですし……その、お掃除とかぐらいの仕事をやったら、どうでしょうか？」

だがパチュリーは、むっとなって小悪魔に反論する。

「なんでよ。私は勉強の邪魔をされそうだから言っているのよ。それに下手に暴れられたらこっちが迷惑を被るってハナシ。それはあなただっけ分かっていないでしょ？」

「あう……そ、そうですね」

小悪魔はパチュリーの言葉にしばらく。白蓮は優しく小悪魔の肩を触りながらパチュリーに言った。

「勉強に勤しむことはいい事です。それを邪魔してまで私も仕事できません……。」

では、あなたの目の見えないところで仕事をしましょう。……そうだ、図書館の燭台の取替えの仕事なんてどうでしょうか？」

白蓮は周囲の本棚を見上げながら言った。

「暗い場所だと、見えるものも見えませんし、ろくに勉強もできないと思いますし……。」

「ふむ……。」

パチュリーは少し考えた。図書館を見渡すと、本棚にくつついてる燭台は、どれも蝋燭が溶けきっており、もはや照明と呼ぶには頼りないものだった。かろうじて明かりを灯しているものも、もうすぐ消えてしまいそうで、まさに風前の灯火というにふさわしいくらいだった。

その哀れな燭台たちを眺め、パチュリーはふっ、と顔がほころんだ。

「最近夜になると暗くて字も見えにくくなって困ってるし。丁度いいわ。じゃあ……。」

「いいんですか？」

白蓮はずいっとパチュリーに迫る。

「え、ええ。よろしく頼むわ」

「ありがとうございます!!」

白蓮は感激した。あまりにうれしくて、パチュリーに思い切り抱きついた。

「むきゅ!?!」

パチュリーは顔を真っ赤にさせながら恥ずかしい声を上げた。

「は、離しなさい! 大の大人が抱きつくなんて! は、恥ずかしいわ……!!」

「えっ!? あっ、す、すみません……。つい、興奮して」

白蓮はすぐにパチュリーから離れると、慌てて髪の毛や衣服を整えた。

「ふう……じゃあ、蠟燭をお願いね。えっと……」

「聖です!」

「そ、そう……。じゃあ、聖、お願いね」

「はい!」

白蓮は大きく返事をする、蝋燭を取りに図書館を後にした。  
白蓮がいなくなった後、パチユリーは誰にも聞こえないような小さな声で微かに呟いた。

「なんで咲夜はあんなのをメイドにしたのかしら」

その小悪魔は呟きから悲嘆がひしひしと伝わってきた。

図書館はいつもどおり静かだった。しかし、今日はほんの少しだけ、いつもの違う音がした。それは息を吹きかける音と脚立の音だった。その音を立てているのは、先ほど仕事を請けた白蓮である。蝋燭を付け替えている白蓮は、口で火をいったん消すと、蝋燭としての原型をほとんど失っている老いた蝋燭を取り外し、新品の若い蝋燭を取り付ける。そしてマッチを擦って点火した。付けられた灯火は、老いた蝋燭よりも勢いよく、若若しい元気な火を灯した。それを見て白蓮は思わずにこりと微笑むと、そのまま脚立を降りて次の燭台へと足を運んだ。

こうした単純作業がしばらく繰り返していくうちに、やがて太陽

は正午を過ぎ、次第に空が橙色に染まっていた。この間に白蓮は昼食を取っていない。ひたすら、このただっ広い図書館の燭台の取替えに勤しんでいた。

パチュリーが違う本を探しに、本棚にやってきた。目的の本を指でたどりながら探していると、視界にふと脚立が目にとまった。見上げれば、その脚立の一番上でひたすら燭台の取替えに勤しむ白蓮の姿があった。白いエプロンと白いカチューシャが際立つメイド服をまとって、白い蝋燭を数本ポケットに入れて、白蓮が蝋燭を取り替えていた。脚立はガタガタと小さく揺れている。パチュリーはそれをみると、無表情な顔にふと、笑みがこぼれた。そしてそのまま脚立を後に通り過ぎていった。

パチュリーは本を探しながら、ポツリ呟いた。

「今日は……来なかったのね」

その呟きは安堵の声であったが、どこか寂しさが伺えたようにも思われた。

しばらくすると、図書館にある振り子時計が重く、鈍い音を立てた。どうやら時刻を告げる音のようだ。その音がしばらく図書館の中で響き続け、やがて鳴り終わると同時に入り口の扉からノックの音がした。

「はい」

小悪魔が羽をパタパタさせながら扉を開けに飛んで行く。

「今開けます。あつ、メイド長」

小悪魔は、はっとなつてすぐさま襟を正した。小悪魔の前には咲夜が立っていた。咲夜は凜とした声で小悪魔に話しかけた。

「聖さんと呼んでくれるかしら？」

「はい！」

すると小悪魔は羽をパタパタさせながら図書館の奥に飛んでいった。

「あんな感じだけど、果たしてうまくやっているのかしらねえ……」

咲夜はポロツとそんな一言を漏らした。咲夜は、朝の聖と星が絡み合っていたのを目撃していたため、それが気がかりで一抔の不安を胸に抱えていたようだ。だが、そんな不安を取り払うようなものを咲夜の目に入った。それは、今まで薄暗く、洞窟のようだった図書館で灯されていた哀れな燭台たちが、明るくなっていったことである。よく見れば一本一本蠟燭が長く、燭台も蠟で汚れていない。そんな光景を見た咲夜はふっ、と優しく微笑んだ。

「『いらん心配はご無用』っていつのかしらね。まあ……いいわ」

と一人でこんなことを言っていた。すると奥から小悪魔に連れられて白蓮がやってきた。白蓮はエプロンの上に手を置いて、なにやらモゾモゾ動かしている。

「随分と図書館を明るくしてくれたようね。おかげで少しは使いやすい場所になったと思うわ」

「えへへ……そ、そうですね。私はただ、頼まれた仕事をやったまですのことです」

白蓮は照れくさそうに笑いながら言った。すると小悪魔が白蓮の前に出て咲夜に言った。

「聖さん、お昼ご飯も食べずにずっと蝋燭を取り替えていたんですよ」

「えっ!？」

咲夜は目を大きくした。

「じゃあ、今まで何も食べていない……と?」

白蓮は恥ずかしそうにモジモジして、目を泳がせながら、こくりと頷いた。すると咲夜は腹を押さえて笑いだした。

「ふふふつ。そこまでがんばっていたなんて！ 随分と頑張り屋さんね」

「え、えへへ……」

しばらくは咲夜は声を上げて、腹を押さえながら大きく笑っていた。だが、急に咲夜は表情が冷静になって、腹を押さえた姿勢からいきなりいつもの立ち方に変わっていた。白蓮はその変わりように一瞬驚かされたが、突っ込むと多分煙たがられるのであえて突っ込まなかった。咲夜は髪を振り払うと白蓮に流し目をしながら言った。

「さ、夕餉にしましょうか？ お腹、減っているでしょう？」

そういわれた瞬間に、白蓮のお腹から空腹の鐘が大きく鳴き出した。するとすぐさま白蓮はお腹に手を当て始めた。彼女の顔が真っ赤に染まった。

「ふふつ、無理もないわ。さ、いきましょつか。食事は個室のほうに届けているわ。今日はそれを平らげて、明日また、仕事を頑張りなさい」

「は、はい……」

その返事を聞くと、咲夜はトランプカードを出して、姿を消した。白蓮も去ろうとしたとき、何かに気づいたか、後ろに振り返った。

「小悪魔さんっ。お疲れ様でした」

美しく優しい笑顔を見せると、小悪魔はにこりと笑って返事をした。

「はいつ！ お疲れ様でした！」

小悪魔は深々とお辞儀をすると、白蓮はそのまま図書館を後にした。

## 一日目 燭台（後書き）

いつもどおりに時間を空けてしまいました。

一日目の前編だけでもやたら長い文章になってしまったのが驚きです。もう少し省いたほうがよかったです。

一日目と書いていますので、七日分を書く予定です。さてはて完結にいくらの時間がかかるのだろうか？

ちょっと先が見えなさそうで怖いです。

そんなわけで後編の星くんに頑張ってもらいたいと思います。  
では。

## 一日目 雑草

目を同じくして紅魔館の朝、星の個室にて

「はあ……」

部屋の中で星は一人、憂鬱なため息を漏らした。くしゃくしゃに幾つ物のシワが出来ていたシーツは既に整えた後だった。星は一人で配給された食事を胃袋に収めていた。パンを齧る度に、不安げに窓の景色をチラ見していた。ちょうど小鳥たちが枝から羽ばたいたところだった。

「大変なところ見られたな……。ああ……。どうしよう」

星は頭を抱えてテーブルに突っ伏した。その弾みで近くにあったティーカップが勢いよく倒れた。ティーカップの紅茶が滝の如くこぼれ、テーブルクロスに染み渡る。

「あわわわわ！ こんなときに！ どどどどうしよう……」

星は追い討ちを掛けられた。だが、なぜか星はしゃがみこんでハンカチを探し出す。慌てる星はハンカチのことで頭がいっぱいのはうだ。

「ゆ、床におちてないのか!? うつ! どこだ……」

近くに鳥が居たら確実に飛んで逃げるだろう。それほど星は焦っていた。その焦りが仇となり、今度は立ち上がる弾みでテーブルを雑倒してしまった。やかましい食器たちが悲鳴を上げながら朝食が床に散乱する。そして皿は大きく割れる音を立ててあつという間に碎け散る。

「うわあああ! 今度はこっちかあああ!」

星は悲痛な声を上げた。

「どどどどどしよう! こんなメイド長に見られたら……」  
「見られたら? なんなのかしら?」

その瞬間、星は凍りついた。グリースを切らした壊れかけのブリキのロボットのようになり、ぎこちなく振り向くと、静かに微笑を湛える咲夜の姿があった。

「うわあああ! なんであなたがここにいいいい!」

星は思わず腰を抜かし、大きくしりもちをついた。そんな星を見下ろしながら、微笑む咲夜はゆっくりと口を開いた。

「随分と……やらかしてくれたわね」

星は声を上げずに、口をわなわなさせている。その姿は、悪戯がばれて、今にも母親に一発叩かれそうな子供のようにだった。星はただ、咲夜の顔を呆然となつて見上げるしかなかった。いや、見上げることだけしか出来なかった。それ以外、悲鳴も、おびえる声も出せない。それほどこの咲夜の威圧にあらゆる機能が麻痺してしまつた。咲夜は低くゆっくりと語りかけるように喋りだす。

「ここまでドジを踏んでもらうと、こちらの手間が増えて困るのよ……。それは、わかっているわね？」

すると手から何本ものナイフが指の間から現れた。刃を光らせながらゆっくりと歩き出す。星は涙をポロポロと流しながら怯え始め、抜けた腰を両手で引きずりながら逃げようとする。それは毘沙門天の代理人とは思えぬ情けない姿だった。

「1」……「1」めんなさい。ごめんなさい……」

ようやく声が出た。だが、とても弱い。そのかすれた声を上げながら星は必死で助けを乞う。しかし、次の瞬間、銀のナイフが

星の頬をかすめた。ナイフは勢いよく床に刺さり、余震した。かすめた頬からは線に沿って紅い血が静かに流れた。

「あ……あ……」

また、星はあらゆる機能が奪われた。恐怖の涙で滲んだ景色は、咲夜の姿を見失ったと同時に暗闇に沈んだ。

「……………っく」

小さくうなり声を上げる。ゆっくりと瞼を開くとそこはさっきまでとは打って変わったの青空だった。視界が明けていき、星はゆっくりと体を起こす。すると星は突然顔を歪ませる。

「痛っ！」

体のあちこちに痛みが走る。よく見れば、腕や足には絆創膏が張

られている。誰が張ったのか分からないが、星はひとつだけ分かっていたことがあった。それは、

「メイド長に殺されかけたの……か」

だった。星は手をかざした。絆創膏だらけの雑な治療が施されている手を見て、星はふと思り返した。

「そういえば、私が人間に追われている時も、聖はこうやって治してくれたっけ？」

星は嘗て山に住んでいたころの自分を思い返していた。人間に追われていた星は白蓮によって匿われ、その時の傷を白蓮の法术によって治療されていた。そんなことをしみじみを思い出していると、横から誰かの声が聞こえた。

「お、治ったのかな？」

星はその声に反応して振り向くとそこには見慣れた女性がいた。その女性は、緑色の中華服に人民帽を被り、紅く長い髪の毛でおさげを結んでいた。片手には救急箱らしきものを持っている。その中華服の女は星の方に歩み寄って、傷だらけの腕を見た。星は、どうやらこの女が自分の治療をしてくれたのだと認識した。

「あなたが私の治療を？」

女は照れくさそうに笑うところ答えた。

「へへっ。まあ、そうだね」

そう言つと女は人民帽を被りなおして立ち上がり、星に手をさし伸ばした。星はその手につかまって立ち上がり、足元を払った。

「ありがとうございます。えっと……」

「ああ、自己紹介まだだったね」

女は笑いながらそういつと体を星の方に向けた。

「私は紅美鈴。紅と書いて美鈴と書くのよ。あと、ここで門番長やつてるわ」

「ほん……みすず？」

星はきよとんとした表情で首をかしげる。美鈴は笑いながら言った。

「あはは、ちがうちがう。『ほんみすず』じゃないよ」  
「えっ？　じ、じゃあ？」  
「ふう、しかたないわね」

すると美鈴は豊満な胸元から何かを探り出した。そして、取り出したのは鉛筆と紙だった。そしてその鉛筆で、紙に自分の名前を書き始めた。

「いい？　私の名前は、こう、『紅』と書いて『ホン』。で、『美鈴』と書いて『メイリン』と読むのよ。分かった？」

星は納得したように大きく手を叩くと、にこやかに笑って言った。

「おおっ！　すごい！　変わった読み方ですね！」  
「えへへ。まあそうでもないよ」

星に褒められたのか、美鈴は照れくさそうに笑みをこぼした。

「ところで、あなたは？」

美鈴は星に尋ねた。

「あ！ すいません。申し遅れました、私は寅丸星といいます。星と書いて『しゅう』と読みます」

「へえ〜。そーなんだ」

「はい」

すると星は美鈴に何かを要求した。

「すいませんが、美鈴さん、その紙と鉛筆を拝借願いたいのですが

……」

「え？ あ、ああ。はい、どうぞ」

星は美鈴と同じように自分自身の名前を書き記していった。

「じつ、書いて、『とらまるしゅう』です。下の名前が特に分かりにくいと思うので書いてみました」

「ほほー！ そうだったのか」

美鈴も納得したように手を打つ。

「しっかし、お互い読みにくい名前だね。『メイリン』に『しゅう』だからね」

美鈴はしみじみとこんなことを漏らした。星が相槌を打って言う。

「そうですね。お互いが当て字みたいなものですからね。でも、これは逆に覚えやすいかもしれませんよ?」

「はは、そうだね。特にあなたのほうが覚えやすいかもね。まあ、私なんかは……ね」

そういつと美鈴は急に沈鬱な顔になった。

「どうしました?」

星は心配そうに美鈴の顔をうかがう。美鈴はすぐに顔を明るくして首を横に振った。

「うっん。気にしないで」

だが星は気にせずにはいられなかった。もしかしたら、自分の発言で傷ついたのでか、そんな心配が頭の中でめぐったからだ。星がそんなことを思っている時、一匹の妖精がやってきた。手には何か手紙らしきものを持っている。妖精は美鈴を見つけるとすぐに飛んできた。

「門番長! メイド長から伝言の手紙を預かってきました」

そう言つと持っていた手紙を美鈴に渡した。

「咲夜さんからか……。ご苦労様」

労いの言葉をかけると、妖精はそそくさと帰っていった。美鈴は手紙の封を切ると、早速手紙を読み始めた。その手紙は非常に達筆な文面であつた。星も一緒になつて読もうとする。しかし、身長差がありすぎて、星は背伸びをして何とか読んでいた。足はふるふる震え、顔は力んで赤くなっている。

美鈴はそんな星に気づかず、文面を読み始めた。

「『門番長へ。今回一週間のみ新規に二名メイドを雇つた。』」

美鈴が読む中、星の顔は徐々に赤く染まる。

「『そのうちの一名は警備のほうへ配備する』」

「ふぬぬ……。も、もうだめ……。」

星はかすれるような呻き声をあげた。

「えっ？」

「ぬぬう……。あうあ！」

「きゃっ!?!」

星の足が限界に達し、勢いよく転げた。将棋倒しのように美鈴も共倒れし、しりもちをついた。星は喉を鳴らしながら息を切らし、美鈴の腹の上で横たわる。

「いてて……。な、なにやってんの？ 寅さん」

美鈴は尻をさすりながら起き上がろうとする。

「はあはあ……。す、すいません。背伸びしてて……。つい」  
「背伸び？ まあいいや」

美鈴は息を切らす星を起こしながら自分もゆっくりと上体を起こしあげる。そして美鈴は星の手をとりながら立ち上がり、星に話しかけた。

「それよりも、寅さん。この手紙を見たんだけど、最近雇われたメイドさんだったみたいだね。それっばい服着てるし」  
「へ?」

星は鳩が豆鉄砲食らったような顔をした。すぐに身なりを見ると、いつもの服からいつの間にかメイド服に変わっていた。

「あれ！？ いつの間にかこんな服に……」  
「ははは、ここで倒れていた時にはもうその格好だったよ。気づいてなかったの？ 寅さん」  
「ええ……」

メイド服のエプロンを握りながら星は首をかしげていた。美鈴は星の肩を軽く叩き、言った。

「まあ、きつと咲夜さんか誰かが着替えさせたんだよ、きつと」  
「むう……」  
「そんな浮かない顔しないの。さつてと、じゃあ早速仕事の説明するよ。咲夜さんから面倒頼まれてるし」

そういつと美鈴は大きく体を伸ばした。その姿はどこか張り切っているようなものだった。美鈴は腕を回しながら星に言う。

「まあ、何をするかっていうと、単純に屋敷の周りを見張りするだけ」  
「へっ？ それだけですか？」

星はきよとした表情で答えた。すると美鈴は手を地面のほうに伸ばすと、青々と生える雑草を引きちぎった。抜かれた雑草には細い根っこが土の一緒にぶら下がっていた。雑草を引っっこ抜くと美

鈴は星に言った。

「ま、見張り以外にやることなかったら、基本は雑草抜きぐらいかな」

そういうと美鈴はポイツと雑草を捨てて、手の土を払った。星は繰り返すように小さく呟く。

「雑草抜き……」

星はあまりにもそっけない門番の仕事にいささか腑に落ちない点があるようだった。見張りというものだから、体を張った仕事かと思えば、単なる雑草抜きぐらいしか日常の仕事はなく、あまりにもあっけないその仕事に星は幻滅した。美鈴は幻滅する星に向かって言った。

「まあ、敵が来てもいいようにいつでも体は鍛えてるよ。それに門番って言う仕事は基本的に非常時の仕事だから。だからさ、そんなに落ち込むほどのことじゃないよ」

だが、そんな美鈴の励ましの言葉も、星には焼け石に水だった。当初、星は白蓮を寺へ戻すのが目的だった故に、仕事に関しての執着は全く無かった。なので美鈴の言葉ははつきり言って無意味だった。

「気にしないでください」

星は美鈴に余計な心配を掛けないよう、微笑みながら美鈴に言った。

「美鈴さん、早く仕事場所に行きましょう」

「……そう。わかったわ」

美鈴は星のことを察したのだろう。美鈴は星に何も聞かず正門へと連れていった。

「さてと、ここが仕事場だよ」

美鈴がつれてきたのは見覚えのある鉄格子の大きな門である。レングアでできた塀は紅く塗装され、隙間から細い蔦が塀に這い蹲って

伸びている。

「さあて、じゃあ早速仕事を始めるよ！」

美鈴が怒鳴ると、いきなり横に倒れた。そして目を瞑り、寝る状態に入った。星は大仰に転んだ。

「ちょ、ちょっとまってください！」

「ん？」

美鈴は横になりながら目を開いた。星は大きな声で美鈴に言う。

「ちょっと美鈴さん！ それっていくらなんでもおかしいですよ！」

「おかしいって？ 何が？」

「だって美鈴さん、さつき体を鍛えるか、雑草抜きをするかって言っただじゃないですか！ それなのに、門の前に来たらいきなり昼寝なんて、おかしい以外に何者でもありませんよ！」

美鈴はうるさそうな顔をして起き上がると、頭をポリポリかきながら星に指差して言う。

「いいっ？ 寅さん。雑草抜きや自己鍛錬はあくまで『門番』の仕事！ 悪いけど私は『門番長』だから、門番の働きぶりと遠くで見

守りながら門を守るの。それに『昼寝』じゃなくて、『シエスタ』よ！」

「どっ、どういう理屈ですかそれ！ それにシエスタって言って、それは列記とした職務怠慢じゃないですか！ 訴えますよ！ 慰謝料請求しますよ！」

「あーはいはい」といいながら美鈴は胸の谷間から耳栓を取り出した。そして耳に装着し、星からそっぽ向いて眠った。

\* \* \* \* \*

しばらくの間、星は美鈴を起こそうと何度か体を揺さぶったり、耳元で大声を叫んだりした。だが美鈴はというと

「むにゃあ……咲夜さあん……おっばいおっきくなって良かったでふねえ……んにゅふふふう……」

などと淫らな寝言を立てている。とても起きる様子は見せなかった。

「全然起きない……」

星は青菜に塩を掛けたようにしょげてしまった。

「はあ……なんだがいい人かなと思って信頼してみたら……。困ったなあ。本当に今日はついてない」

そう呟くと、塀に寄りかかって座り込みんで、大きくため息をついた。ふと足元に目をやると、地面の雑草は足が草に埋もれるくらいまで生えていた。

「うわ……。生えすぎでしょ……………これ」

星は汚いものを見るような目で足元を見渡す。その雑草たちはひとつの樹海のように鬱蒼と生い茂り、虫にとっては格好の居住区のようにだった。

「これじゃあ草抜きしないとみっともないね。コレも一応お仕事だし」

そう言うのと体勢を変えた。しゃがみこんで雑草を抜き始めた。しかし、雑草は手から滑り、根っこはおるか、葉っぱすら千切れていない状況だった。

「うっ……。タフなやつ」

ぷうつと頬を膨らませると負けじと星はメイド服の袖を捲くり、今度は両手で引っこ抜こうとした。すると今度は雑草は葉っぱがちぎれる音を立てて抜けた。葉っぱが勢いよく千切れたため、星は勢い余ってしりもちをついた。

「あうっ！ い、いててて……。もう！ あったまきた！」

星はエプロンを脱ぎ捨てるとまた葉っぱだけちぎれた雑草の方に手を伸ばし、思いつき引っこ抜いた。だが、葉っぱが千切れた所為で掴むところは短く、なかなか根っこまで引けない。

「むぐう……。こいつ〜ぬ〜け〜ろ〜お！」

顔を真っ赤にして全身をぶるぶると振るわせる。すると次第に根っこが抜ける音が響き渡る。

「きゃあー！」

星はまたしりもちをついた。手に持っている雑草を見ると、白い根っこがしっかりとくっついており、そこにはこげ茶色の土がたっぷりついていてる。それを見ると星はほっとした顔を綻ばせた。

「ふう、やっと抜けた。なかなかタフだったけど、案外草抜きって面白いものだね」

そう言うと星は再び腰をかがめて、雑草抜きを再開した。

草を握っては抜き、握っては抜き、握っては抜き……。そうした単純な作業が延々と繰り返されていた。だが星は決してその作業を飽きることはなかった。引っこ抜くたびに、雑草で鬱蒼としていた足元の視界が明けていくのを見ていると、なんともいえない充実感と達成感に浸れるからだ。そんな星の傍ら、美鈴は終わることのないシエスタをし続けており、未だ目覚める気配はなかった。

そして、そんなことをしている間に、いつの間にか夕方に差し掛かっていた。星は手で汗を拭い、美しい夕焼けを見上げた。

「わあ……もうこんな時間だ」

空は鴉たちが群れを成して巣へと戻っていく。小さなゴマのように点々と動いていく鴉たちをしみじみと星は見ていた。

そして、ふとこんなことをつぶやいた。

「あの鴉たちは一体どこへ帰るんだろう？」

「鴉は山へ帰るのよ。人が入れないようなね」

星はすぐさま振り向いた。そこには咲夜がたたずんでいた。手に

は、あの銀のナイフをちらつかせている。

「あつ……メイド長……」

「草抜きを、していたようね」

咲夜は、足元でナイフに刺されて横たわる美鈴を軽く蹴りどかして星に歩み寄る。

「情眠を貪る門番と違って、頑張り家さんなのね」

星はおびえて全身を振るわせる。だが星はそこで愛想笑いをして、どうにかやり過ぎそうとした。

「なんだか、似てるね。軽いデジャヴでも起こしそうなくらいに」

咲夜は手のナイフを足に装着しているポケットに仕舞い込みながら淡々としゃべる。だが、その顔には笑みがこぼれていた。

星は咲夜の「似てる」という言葉に疑問をもった。目を泳がせ、頻繁に瞬きをしながらおそるおそる質問した。

「あ、あの……似てるって、誰にですか？」

咲夜は薄ら笑いにこう言った。

「そうね、あなたにとって、一番大切な人のことかしら？」

そう言つとトランプカードを手に取った。

「とりあえず、今日はご苦労様。夕食をあなたの個室に届けておいてあるから、今日はそれを食べなさい」

「ありがとうございます」

「でも、その前に」

「？」

咲夜は星の元に歩み寄ると、その繊細な指で星のほっぺを刺した。そしてにこりと微笑んだ。

「まずは、その姿を綺麗にしてくるのよ」

そう言つと咲夜はトランプカードを顔元に近づけ、そして一瞬のうちに姿を消した。咲夜のいたところには数枚のトランプカードが残されていた。星は自分の手を見た。その手は土でべたべたに汚れていた。星は頭を掻きながら言った。

「これじゃあ、注意受けるのも仕方ない……かな？」

星はトランプカードを拾って館内へと向かった。星はそのトランプカードを見つめながらこんなことを漏らした。

「このトランプカード、捨わないのかな？ そのまま捨てるなんて勿体無いなあ……」

しみじみとトランプカードを見つめながら星は歩いていった。

星が館に入ると、妖精メイドたちは楽しそうに会話をしながら飛んでいた。その手にはタオルなどの洗面用具を持っていた。

「お風呂もう沸いてるんだ」

星は妖精メイドたちを見送りながらボソツと呟いた。

「さて、私も入らないと。頑張っちゃったからなあ」

星は個室へと歩いていった。

個室へ到着した星は、部屋の中のクローゼットを開けた。クローゼットの中には、替えのメイド服と数枚のタオルが掛けられていた。

「洗面用具って、何処にあるのかな……？」

星は首をかしげながら周囲を見渡す。

「洗面所、かな？」

星は部屋の洗面所に向かうと、確かに洗面用具がおいてあった。それをタオルと一緒に手に持って部屋を出た。すると同時に隣の部屋から白蓮も出てきた。

「あつ、聖！」

「あら、星？」

星のほうを振り向いた白蓮の手には、星と同じように洗面用具とタオルを手に持っていた。しかし、白蓮は桶にその洗面用具を入れていた。

「あれ！？ 聖、部屋にそんな桶あったのですか？」

白蓮はにこりと微笑んで答えた。

「ええ、あったよ」

すると星は慌てて白蓮に聞いた。

「うえ！？ あ、ありましたか？ そんな桶」

「え？ あったわよ？」

「で、でも洗面所には……」

すると白蓮は持っている桶を二つにした。

「あっ！ 聖どこから桶をもつひとつ持ってきたのですか！？」

星は驚いた表情で白蓮に言う。ただ桶が重なっていたからもうひとつ取り出せただけなのだが……。それに気づかないゆえに宝塔

云々を無くしたりするのだろう。きっと。

すると白蓮は星に顔を近づけた。そのまま行けばキスしてしまいそうなくらいの至近距離で。

「ふふっ。内緒よ」

「あっ聖！」

白蓮は踵を返して浴場へ向かった。浴場へ歩いていく聖の足取りは軽く、陽気だった。

「全く……聖ったら。でも、本当に楽しそうだなあ。よっぽど満足してるんでしょうね」

星は、遠ざかっていく聖の後ろ髪を見ながら安堵の声を漏らした。その後ろ髪はふわりふわりと左右に揺れている。

「ええ、今日の彼女にはMVP賞を授与したいくらいね」

「えっ。うわぁ！」

背後から突然咲夜の声がした。星はその声に意表を突かれ、驚き、そして腰を抜かした。桶に入っていた洗面用具一式が廊下に散らばる。

「そんなに驚かなくてもいいでしょ……」

半ば呆れた様子で咲夜は腰の抜けた星を見下ろす。咲夜の手にも洗面用具などを持っていた。

「め、メイド長もこれから、風呂へ？」

「そうね。私もこう見えて一応人間であるし、女だしね。そりゃ毎日清潔にしたいわ」

「そ、そうですか」

「ほら。手、出しなさい」

咲夜は星に手を差し出した。だが星は

「だ、大丈夫です。ナイフが仕込んでありそうで怖いので……」  
「言ってくれるね。あなた」

星は「しまった」と大いに後悔した。咲夜に殺されないうちに、星はすかさず床に突っ伏して

「すみませんでした!!」

と廊下中に響き渡るような大きな声を上げながら土下座した。奥のほうで妖精メイドたちが何事かと思いい星を見ている。

「ちょ、ちょっと何やってるのよ」

「失礼なこと言いました！ だから、ころさないで！」

「そんなことでいちいち怒らないわよ」

「へ？」と拍子が抜けたように星は顔を上げる。

「まあ、いいわ。あなたって、面白い人ね」

「な、なんで……」

咲夜は指を指した。星は土下座の体勢で後ろを振り向くと、何匹かの妖精メイドたちが、星を見てクスクスと笑っている。

それを見てしまった星は顔から火が出るような思いをしてしまった。

「さあ、いきましょうか」

咲夜は恥情に塗れる星の手を取りだして、浴場へ一緒に歩き出した。

\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*

「白蓮さんは随分と仕事を楽しんでるようね」

咲夜が言う。

「まあ……やりたいと思っていた仕事に就けたからじゃないでしょうか」

「それで大丈夫だったの？」

「それは……」

星は苦笑いをしてみせた。命蓮寺の皆は「どっちでもいい」という意外に冷めた反応だったので大丈夫といえは大丈夫であった。が星としては、嘗て自分を毘沙門天の代理人として推薦し、自分にとって大きな存在だった白蓮が、救済活動を抜けてメイドの仕事になるということがショックを生んだ。

「できるなら、今すぐでも聖と一緒に寺へ戻りたいです」

「あら。強引なことを言うのね」

咲夜は少し驚いた顔をして言った。けれど星は少し頭を落とすと半ば諦め様子で言った。

「といっても、きっと聖は断固拒否するでしょう」

星は困った顔をして頭を掻く。咲夜は「ふふっ」と笑い出した。

「どうしたのですか？」

「いえ……ただ、あなたって、見た目どおり不器用だなんて「な!？」」

星は驚いて咲夜のほうを思いつきり振り向く。すると咲夜は含み笑いをしながら颯爽と歩いていき、

「さ、早くしないと、浴場が妖精メイドたちに占領されるわよ」

と催促した。

「なんだか……馬鹿にされたような……」

星は腑に落ちない顔で浴場へ向かった。

命蓮寺

「遅いね……聖」

水蜜は縁側から暗い空を見上げて言った。小さな星屑たちが空に散らばっている。

一輪が水蜜の隣に座り込んできた。

「そうね。姐さんなかなか帰ってこないね」

「一日で終わると思って追っかけなかったけど、さすがに心配になってきたな」

白蓮が紅魔館に向かったと聞いても、さほど動揺しなかった水蜜が心配そうに空を見上げている。

そんな水蜜の肩を、一輪は優しく叩いた。

「心配はいらわないわ。姐さんのことよ、直に帰ってくる」  
「ありがとう……」

水蜜はそつと一輪の手を下ろした。

昼間の様子と打って変わり、命蓮寺は、白蓮の帰りを憂う夜だった。

毘沙門天像を納めている一室は、明かりも無く真つ暗だった。

- T o B e C o n t i n u e -

## 一日目 雑草（後書き）

絶賛MGS中のZIRANです。

コレでようやく一日目終了です。長かった……。

いちおう残り6日間も同じように進める予定です。あれ、前も言っ  
たかしら？

今回は予想以上にてこずりました。地の文の表現が上手くできなかつたところです。

他の方の作品を拝見しますとやっぱりボキャブラリーの差が違いますね。他の方は表現の豊かさに改めて驚きました。

次からはまた、白蓮さんの起床から始まります。

では皆さんまた。 (\*・\*・\*) ノシ

P.S. PWにボカロ機能に気づいたのが今日でした。すごいね  
ヒデオさん

## 二日目 葛藤

### 朝の命連寺

さんさんと陽光が降り注ぐ縁側。そこに水蜜が一人、座っていた。

「まだ帰ってこない」

彼女はさびしそうな声を上げた。今ここにいるのは水蜜、彼女だけである。一輪は寺には居ないようだった。

「聖、どうしたのかしら？ まさか寺のことを忘れて……」

水蜜は首を激しく振る。そんなことない。聖が寺のみんなを忘れるはずない。きつと夢中になっているからだ。

そうやって自分に言い聞かせていた。しかし、そんなことを昨晩から続けている。次第に本当に忘れてしまったのかと思いこむようになっていた。

「昼ぐらいから、様子見に行こうかな。でも、聖が行った紅魔館って、一体どこにあるんだろう？」

水蜜は空を見上げた。千切れ雲が、当てもなくゆらゆらと空に浮かび、その不安定で大きな隙間から陽光を漏らしている。そんな空を見て彼女はため息をついた。

「場所がわからないようじゃあ、様子見なんて無理ね……はあ……」  
「杞憂だな、ムラサ！」

水蜜の足下からナズーリンが突発的に現れた。

「ひゃあ!？」

水蜜は驚いて腰を抜かした。ナズーリンはスカートを風でたなびかせながら、ダウジングロッドを指先で器用に回す。

「ナ、ナズーリン!？ あなたどこから……」  
「まあまあ、そんな無粋なことを聞かずに。それよりも、例の聖様を探そうと思っっているようだね」

水蜜は頭を掻きながら「まあ……ね」と答えた。その顔はどうも腑に落ちていないようにも見えた。ナズーリンはそのまま得意げに話し続ける。

「まあ、こついつても難だが私は探し物を探すのは朝飯前でね。今ムラサが探そうとしている聖様の居場所も見つけれるよ」

そういつと水蜜は弾かれたようにナズーリンの顔に近づいた。

「本当に!?!」

ナズーリンはあまりの近さにたじろぎながら答える。

「あ、ああ。ムラサ、近いからちよつと下がってくれないか?」

「え? あ、ごめんなさい」

水蜜は乗り出していた体を引つ込めると、ナズーリンは咳払いをして話の続きをする。

「ムラサが聖様を心配してるのは分かるさ。私も御主人の様子を確かめたいしな」

「だったら昨日ぐらいでもすぐに居場所へ辿りつけれるでしょ? どうして今になって」

「じ、実はだね……。そこに問題が……」

ナズーリンが言葉を濁すと、彼女は自分のスカートをたくし上げ

た。水蜜は顔を真っ赤にし始め、慌てだした。

「ちよつちよつとナズーリン!? 何をいきなり! は、は、発情期なのあなた!？」

「違う! 落ち着け」

ナズーリンが水蜜の頭を叩くと、自分の向う脛を指差した。そこには赤い線が泣き所からふくらはぎまで走っている。鋭利な物による擦過傷だ。今は瘡蓋となって固まっている。

ナズーリンは苦々しそうに言った。

「実はだな、先ほど紅魔館へ着いて周囲を飛んでいたらな……誰かにナイフのようなものを投げつけられたんだ。いや、その前に心臓が止まるような殺気を感じたんだ。それに、時間が止まったような感覚も。で、気づいた時にはこんな傷ができていた……」

話しているうちにナズーリンを冷や汗をタラタラと流していた。普段は冷静なナズーリンが恐怖で顔が硬直している。水蜜も聞いているうちに思わず身震いをしてしまった。

「そ、そんなにも……危うい場所に行ったの? 知らなかった。聖は……」

「十中八九だな。御主人が着いているとはいっても、あの人では……」

「聖……」

そんな危険なところへ行っただとは知らなかった水蜜は、止めなかつた自分に対する後悔と自責の念が、強い渦潮となつて彼女の心に大きく渦巻いていた。

\* \* \* \* \*

そんな水蜜の心配をよそに紅魔館内の図書館にて

白蓮はメイド服に正装して、図書館にいた。彼女の前にはパチュリーがいた。パチュリーはメイドの彼女と話をしていた。

「昨日のおかげで少しは図書館も明るくなつたわ。けど仕事はまだ残っているはず。とりあえず私が前々から気になつていたところを言つわ」

パチュリーは「連いてきなさい」と指でサインを送ると、彼女に続いていった。小悪魔が「パチュリー様は普段ああいう風に言われないんです。きっと昨日の仕事振りに感心したんでしょうね」と口ぞえした。

「あら、それは良かったです。そういう風に受け取られるとやりがい感じますわ」

と本当にうれしそうに彼女は言った。

「何してるの？ 早く着なさい」

パチュリーは振り向いて白蓮を呼ぶ。白蓮は小悪魔に「ありがとう」と囁くと、彼女は返事をしてパチュリーの元へ走っていった。

「着いたわね。じゃあ今日の仕事の説明に入るわ」

パチュリーは目の前の本棚に騒然と並ぶ書物を指差した。

「今日は本の整理を頼むわ。なに、本の整理と言っても、ただ本を綺麗に並べるだけなんだけどね」

「え、じゃあ種類別とか、名前順にしないのですか？」

「ええ、する必要ないわ。そんなことをしていたら、種類が分かりすぎて困るわ」

「？ それじゃあ逆にいいのでは……」

白蓮が本棚たちを見渡しながらパチユリーに疑問を問う。本棚に横たわる多くの書物たちは、所狭しと敷き詰められ、息苦しそうに収納されていた。

パチユリーは白蓮の問いに対し、

「逆にまずいの。兎に角まずい」

と、理由を暈してあしらった。

「さ、早く作業に取り掛かって頂戴。でないと本当に大変なことになるんだから……」

最後に意味深長な言葉を残して、パチユリーはそそくさとその場を去っていった。

聖は未だ解せぬ疑問を抱きながら、脚立を上り始めた。そして雑然と積み上げられ、半分放置されたような状態の書物たちの整理に取り掛かった。

\* \* \* \* \*

小一時間ぐらいの時間が流れた。程なく本の整理がついたのか、雑然と本棚で散らばっていた書物諸々は上下の向きまで、綺麗に揃え

られた。

「ふう……。ひとまず終わったね。すぐに終わると思ったけど、案外時間のかかる作業だったなあ」

単純な仕事の意外な大変さを噛み締めながら、聖は一息入れようと脚立から降りようとしていた。

白蓮が脚立から降り終わったその瞬間、バルコニーのガラスが大きな音を立てながら割れた。

「な、何!？」

白蓮は慌ててバルコニーへと向かう。その方向にはパチユリーが居るところだ。白蓮は全速力でバルコニーへ駆け、到着すると、パチユリーが椅子に座りながら割れたバルコニーを眺めていた。白蓮はすぐに彼女の元へ駆け寄った。

「パ、パチユリーさん！ 大丈夫ですか!？ 何処か、怪我は」

「私は大丈夫よ。それよりも、本棚は大丈夫?」

白蓮はすぐさま後ろを振り向き、本棚を見渡した。本棚は静かに、泰然と立ち並んでいた。

「大丈夫です」

パチュリーに無事を報告した。

「そう……」

パチュリーは静かな声でゆっくりと立ち上がった。その手には一冊のグリモアを所持していた。白蓮はパチュリーのその恐ろしいほどの冷静さに驚きの色を隠せなかった。バルコニーが大破するという異常事態をパチュリーは悲鳴の一言も上げずに、こうして泰然とこの小さな椅子に座っていた。とても常人の態度とは思えぬものだった。そんな彼女の冷静さに、白蓮は圧巻されていると、パチュリーは大声を上げた。

「そこにいるのは分かっているわ！」

その言い口は、誰かに言っているようなものだった。白蓮は忍び足でパチュリーの後ろに行くと、そこには見慣れた人物が居た。

「今日こそ、今までの分、返して貰うわ！ 魔理沙！」

「え？ 魔理沙？」

パチュリーがグリモアを広げながら『魔理沙』と呼ばれた人物が

ゆっくりとパチュリーのほうを振り向く。魔理沙だった。

魔理沙は「へへっ」と嘲笑しながら言った。

「分かっていないな、パチュリー。貸借期限はまだ切れていないぜ。今更そんなこといわれても、困るな」

その男勝りな口調で魔理沙はありがちな言い訳をする。パチュリーは声を荒げて反抗する。

「冗談じゃないわ！ 何が『貸借期限』よ！ アンタの『貸借期限』は『貸借』の時間じゃなくて『死ぬまで』の時間でしょ！」

「わかってるじゃないか。そうだぜ。まあいいじゃないか。私よりパチュリーは寿命長いし、待てるものも待てるだろ？」

「そういう問題じゃない！ 今日という今日は我慢ならない！ 痛い目合わせて泡を吹かせてやるわ！」

するとパチュリーは勢いよくグリモアを開くと、何かを呟きだし魔法陣を足元に広げた。魔法を詠唱し終え、パチュリーは大きく叫んだ。

「喰らいなさい！ ファイガ！」

パチュリーの指先から業火がほとばしる。

「どこかで聞いたことのあるような……」

白蓮はこつそり呟く。

業火は勢いよく標的の魔理沙めがけてホーミングした。だが数個の業火は当たる直前にかき消された。

「あれほど大きな炎を消すなんて……」

白蓮は呆気にとられ、感嘆の声を漏らす。

「ふう。危うくケシミスになるところだったぜ。でもなんで消えたんだ？」

魔理沙のほうも炎がかき消えたことに驚きを隠せていないようだ。  
すると

「「あ」「」

白蓮と魔理沙は思わず声を揃えてしまった。二人の眼前には、仰向けになって倒れているパチュリーだった。時折指をピクピクとしたりしているが、完全に気は失っている。

魔理沙は近づいて笑いながら言う。

「やれやれ、無茶しやがってよ。おとなしくしていればこんな目にあわなかったのにな」

蔑んだ口調ではあるが、魔理沙は律儀にパチュリーを抱いて小悪魔を呼んだ。小悪魔が奥から急いで飛んでくる。

「おい、こいつをベッドに休ませてくれ。無茶したせいで完全にグロッキーだ」

「こあ！ 大丈夫ですか!？」

「ああ大丈夫さ。多分芯は強いだろう」

そういうと魔理沙は小悪魔にパチュリーを引き渡した。だが小悪魔は持ちきれずパチュリーは地面に叩きつけられる。しかし目覚めない。小悪魔は仕方なくパチュリーを引きずりながらベッドへと運んだ。

「やれやれ、丁寧じゃないっいたらありゃしない」

まるで他人事のように魔理沙が呟くと、箒にくくりつけていた大きな袋を担ぎ出した。白蓮は魔理沙を止めた。

「ちょっとまってください」

「ん？」

魔理沙が振り向く。魔理沙は白蓮を見ると、思い出したように表情を変えた。そして彼女に指差しながら魔理沙は大声を上げた。

「あ！ お前はあのときの同業者じゃないか！」

「お久しぶりです」

「寺の尼さんがこんなところでメイド服になって再会するとは思わなかったぜ」

「私もあなたの野人ぶりを二度も拝見するとは思わなかったですよ」  
「へ？」

白蓮は魔理沙に一步詰め寄って問い質す。

「あなた、あの時と全く変わらずにいるようですね。しかも体の弱い魔法使いにあんな仕打ちを……」

「し、しかたないだろ！？ アレはパチュリーが勝手に倒れたんだ！ 私が悪いわけじゃない！」

すると白蓮はさらに一步詰め寄り、魔理沙の鼻が触れ合うぐらいまで顔を近づけた。その瞳は弱者を守る強い眼差しだった。

その瞳に見つめられ魔理沙は大いに困惑した。目をかなり泳がせる。

「そうやって言い訳をして……。もともとはあなたが物をくすねたのが悪いのでは？ パチュリーさんの口ぶりからでは、今に始まったことではなさそうですし」

「あのな、それはパチュリーの気が短いからだ」

「気が短い？」

白蓮は静かに眉をひそめる。その表情に魔理沙は唾を飲んだ。

「あ、ああ。私はいつもこの図書館から魔術の本とかを借りているんだ。ほら、同業者のあんたなら、話は分かるだろ？ 魔術は一朝一夕で習得できるものじゃないってことを」

魔理沙の額には脂汗が滝のように流れる。白蓮も人間の頃、命蓮から魔理沙と似たような魔法である法術を学んでいた。その困難さは白蓮も理解している。そのため白蓮は反論せずただ頷いた。

「それにさ、人から教えてもらうって言ったってパチュリーは体弱いからあんまり根詰めて教えてもらうことはできない。だから本に頼るしかなかったんだ。けど本だとやっぱり理論だけじゃないか。だろ？ 実践も兼ねていたりして理解を深めるとやっぱり時間がかかる。結局は返却期限を延滞しないと会得できないじゃないか」

魔理沙は額の汗を拭くと白蓮に向かって大きく結論付けた。

「だから！ パチュリーは気が短いんだ！ 自分が読みたいからって私の境遇も理解してないんだぜ。体弱い者とか、力がない者がみんな守るべき者で、必然的に弱者とは限らないんだぜ！」

白蓮はその言葉を聞くとしばらく顔をうつむかせた。魔理沙は「しまった！」と絶望した。もしかしたらまたこいつと弾幕ごっこが始まるんじゃないか。だとしたら相当厄介なことになるぞ……。だったら、そうなる前に逃げるか……。

魔理沙は白蓮がうつむいて視線が床に向いている隙を突いてその場から立ち去ろうとした。上手く白蓮の後ろへ回り込み、箒に跨ってバルコニーから逃げようとしたそのとき。

「待ってください」

魔理沙は一瞬心臓が止まったような気がした。息を荒げながらゆっくりと振り向いた。さっきまでうつむいていた白蓮の頭が上がっている。南無三！ 魔理沙は心の中で叫んだ。こうなったら、一か八かで戦うしかない。覚悟を決めた魔理沙は服のポケットからスペルカードを取り出した。体勢を低くして構える。すると白蓮は魔理沙のほうを向かないまま、独り言のように小さく言った。

「あなたのその言葉が本当なら……。私は何も言いません」  
「へ？」

意外な一言に魔理沙は思わずスペルカードを手から離してしまっ

た。手から離れたスペルカードは音も無く床に滑り落ちる。

「パチュリーさんに見られるとまずかったのでしょうか？ でしたら早く、用を済ませてください」

魔理沙が予想していた展開とは大きく違い、白蓮は魔理沙のことについて目を瞑ると言い出した。魔理沙は何が起きたか理解できず、ただ「お、おう……」と中途半端な返事しかできなかった。

そうして魔理沙は大きな袋を背負うと、そそくさと本棚のほうへ走っていった。そして本棚から本を一冊ずつ取り出しては、乱雑に袋の中へ投げ入れる。その光景を白蓮は何も言わず、ただ悲しげな目で見ていた。そして魔理沙が本の蒐集が終わると、また忍び足で走ってきた。魔理沙は白蓮を見ると、こんなことを言った。

「いいのか？ あいつにこのことが知られたらあんたは大変なことになるぜ」

白蓮はちらりと魔理沙の目を見た。魔理沙はなぜか彼女に申し訳ない気持ちで沸いた。

「いや……すまねえ……じゃあな」

魔理沙はその言葉を最後に箒に跨り、そのまま割れたバルコニーから出て行った。白蓮は魔理沙の去ったあとをただ黙って見上げて

いた。奥からパチュリーの声が聞こえる。いつもの冷静さが欠けた荒げた声だった。

「待ちなさい！ 魔理沙あ！」

白蓮は振り返ると、小悪魔に支えられながら、かろうじて歩いていた。ゼエゼエと息を切らし、顔は冷や汗で光っていた。

「ああ、聖！ 魔理沙が今バルコニーから出て行ったわ！ まだ遠くないと思うからすぐに……ゲホッ！」

喉が鳴るほどの酷い咳き込みをしながらパチュリーは白蓮に言う。しかし白蓮は行こうとはしなかった。

「なにやってるの！？ あなた、アイツの事知ってると思うけど、『ただの』魔法使いじゃないからね！ 借りたものは返さない』太い』魔法使いよ！」「  
「そうですか……」

白蓮は上の空のように答える。パチュリーはその態度に腹が立った。支えの小悪魔を蹴飛ばして白蓮に詰め寄る。さっきの衰弱振りが嘘のように力強く、素早かった。

「あなた、なんなのその態度！ 図書館の本よ！ 一冊がどれほど大事なものが、分かっているの！？ とても価値あるものばかりなのよ！」

パチュリーは怒涛の勢いで白蓮を責める。すると白蓮は冷めた目で言った。

「あの人も悪いけど、あなたも執着心が強すぎですよ？ もう少し、寛容の心なんてないのですか？」

「か、寛容だって！」

パチュリーは顔を真っ赤にした。するとグリモアを取ってきて思いつきり白蓮の頭をぶっ叩いた。白蓮は頭をグラつかせ、足元が少し崩れた。小悪魔は後ろで怯え、硬直している。パチュリーは白蓮の頭を叩きながらなおも叫び続ける。

「なによ！ いい人ぶって！ 他所のものを盗んでそれを見て見ぬ振りをするあなたこそ寛容の心なんてないのよ！ 私はいつものよ、いつもアイツが盗っていく様を指銜えて眺めているしかなかったのよ！」

白蓮は黙ってグリモアの連撃を受け止めている。未だ連撃が止む気配はないものの、次第にパチュリーの顔色が悪くなる。

「何があつたか、知らないけど！　アイツの手を貸して……いることに変わりはない……の……」

手に持っていた厚いグリモアは手から零れ落ち、細い足が絡まりながらバランスを崩す。パチュリーはまた意識を失った。後ろで怯えながら見ていた小悪魔が急に飛び出して、パチュリーを介抱し始めた。

「こ、こあ！？　大丈夫ですか！？　無茶するから……」

小悪魔は真つ青なパチュリーの腕を掴み、負ぶさると、白蓮に優しくこう言った。

「あの……気にしないでください。きつとパチュリー様は悔しかつたんですよ。弱い自分に対して。だからあなたが悪くないんで……」  
「私のせいで、あの人に本を盗ませてしまったのです……」

白蓮は声を上げて言う。拳が震えるほど強く握っている。それを見た小悪魔は何かかける言葉を探すように目を泳がせたが、ついに見つからなかった。小悪魔は悲しそうに小さく息をつく、ただ一言こんなことを言った。

「とりあえず、今日は部屋へ戻って休んでください……。そしてまた明日来て下さい」

小悪魔はパチュリーを重そうにベッドのあるほうへ運んでいった。白蓮はその様子を見送ると、静かに、何も感じないように出口へと消えていった。

そして彼女が去って数十分後、ベッドで休んでいるパチュリーに向かって小悪魔が言った。

「どうしてあんなにも強がったのですか……。なんにもあそこまでやらなくても……」

パチュリーはしばらく黙り込んでいた。もちろん意識は戻っており、体力は回復している。しばらくしてパチュリーは言いにくそうに口をあけた。

「悔しかったの……。気持ちが変わらないのに、悔しさだけが……」

そのままパチュリーはシーツの中にもぐりこみ、深い眠りに就いた。

\* \* \* \* \*

「あら？」

モップを片手に大理石の階段を磨いていた咲夜が思わず手を止めた。白蓮が自分の個室に向かってふらふらと歩いてきたからだ。

だがその様子は何処か力ない。浮ついた様子の白蓮に異変を感じた咲夜はエプロンのポケットから数枚のカードを取り出して、白蓮のほうへ瞬間移動した。ため息をつき、暗い表情で白蓮は廊下を歩く。そこへ背後から咲夜の声があった。

「いつもの笑顔は何処へ行ってしまったのでしょうかね」

白蓮は振り向いたが、軽く会釈をして、また廊下を歩き出した。咲夜は彼女の肩をつかみ、体を咲夜のほうへ回させた。咲夜は言った。

「逃げないで。私はあなたを、心配して言っているのよ」

優しい口ではあるが、瞳は強かった。白蓮は目を背ける。すると咲夜は掴んでいた肩をゆっくり離すと、彼女は白蓮に言った。

「手を、出さない」

白蓮が手を出すと、咲夜は何かを手渡した。その何かとは、いつ

も咲夜が持っている懐中時計だった。

「何ですか？」

咲夜は髪を払うと、ポケットからもうひとつ懐中時計を取り出した。そして時計の針を指差しながら言った。

「夕餉まで時間があるわ。しばらく、自分の部屋の整頓をするなりして頂戴」

「えっ？」

すると咲夜はいつものように一瞬で姿を消した。廊下で立ち尽くす白蓮はしばらく懐中時計を見たまま、咲夜の行動の意味を考えていた。だが、すぐにそんな気も失せ、すぐに部屋へと帰って行った。

\* \* \* \* \*

部屋に戻った白蓮は、メイドの服を着たままベッドへ転がった。うつ伏せになっている。彼女は図書館であった一連の出来事を回想していた。そして、自らのやっていたことが正しかったのか、己の考えが正しかったのか……。そういった誰にも正しいといえない曖昧で、微妙な問いにひたすら思い続けていた。だが、そうするうち

に、次第に彼女はまどろんでいった。閉じる瞼が完全に閉まったとき、天辺へ上り詰めていた太陽は、静かに西へと傾き始めていた。そしてパチュリーも、その頃に深い眠りに就いていた。

- T o b e c o n t i n u e -

## 二日目 葛藤（後書き）

どうもこんにちは。ZIRANです。

最近どうもPCの熱暴走が激しくて、毎日ヒヤヒヤして執筆して  
います。

なので次回からはアナログに原稿用紙でやろうかと検討中です。

そして、ようやく執筆の合間を割く方法を見つけて、コツコツと執  
筆できています。

今まではどうも合間を割く方法を見つけられずにズルズルといってし  
まったので^^^；

そんなわけで読んでいただきありがとうございます  
次回もよろしく願います。

## 二日目 意外

手に痛みが走った。おもわず星は飛び起きる。手には、絆創膏が少し乱雑に貼り付けられていた。それを見て、星は昨日のことを思い出した。

「そうか……昨日ので」

怠惰的な上司の美鈴に代わって、ただひたすら雑草を抜いていた自分を想起する。素手で抜いていたものだから、手は**鞞まみれ**だった。

「そういえば、昨日のお風呂は大変だったな。この傷のお陰で、まとも入れやしなかったよ」

苦い思い出を回想して、星は苦笑いする。

「あ、今日もしかしたらまた草抜きかな……。だったらメイド長に頼んで軍手か何かを借りないと……」

星は咲夜に会いに行くためベッドから降りた。そしてそのままスリッパを履いて行こうとした……がその途中でカーペットに躓き、盛大にスリッパが舞い上がった。星は思いつきり転倒、昨日に続き、

またもや顔面を打ちつけた。

\* \* \* \* \*

朝一から派手な転倒劇を披露した星は、花の痛みを残して朝食を済ました。転倒で真っ赤になった鼻を咲夜に笑われながらも拝借した軍手片手に門のほうへ向かった。転倒してから鼻血を出したのか、ティッシュを丸めたお手軽鼻栓を両穴に装備していた。とても滑稽な様子だったため、通りすがりの妖精メイド達は皆はクスクスと笑っていた。中にはこらえきれず、噴き出したものもいた。星は顔から日が出るような思いで館の外を出た。

彼女が門にたどり着くまでに、威勢のいい声が耳に入った。もしかしたら、と星は思い駆けると、誰かが修行らしきことをしていた。

門番長が修行している！

彼女は今まで幻滅していた美鈴の姿を改めた。手に持っていた軍手を落とし、そのまま彼女の姿に見入った。

「セイツ！ セイツ！ ハアツ！」

気合の入った掛け声を出すたびに拳を木に向かって打ち込む。そ

の拳の速さは、肉眼ではわずかにしか捕捉できないくらい速さだった。

「あ、あれが昨日と同じ人だななんて……」

星は戸惑いながら、感嘆の声を漏らす。しばらくすると、美鈴はまったく違う構えを取り、呼吸を整え始めた。彼女の右手が鮮やかな七色の光に輝きだした。そして……

「彩符『極彩颱風』!!」

スペカ使ったー!? 星はいきなりのスペカ宣言に唖然となった。

美鈴の強い掛け声とともに虹色の弾幕を纏いながら正拳突きをした。すさまじい轟音が周囲に響き渡る。小鳥達はあわてて逃げ出した。野うさぎは穴の中へと逃げ帰ってしまった。門の影から美鈴を見ていた星は、その津世衝撃と轟音でバランスを崩し、腰を抜かした。しかし、強かったのはその衝撃だけではなかった。なんと木から煙が舞い上がっている。星はよろめき、門につかまりながら見てみた。

「う……嘘。貫いて……る」

また唖然とした。星の目に映った光景、それは美鈴の手が木の幹を貫いていた。人二人分の胴体の太さほどある幹だ、並大抵の力で

は貰けない。その舞い上がる煙がいかによやく、すさまじい力だったかを物語る。美鈴は腰を低くし、引くと、木屑が碎ける音がした。その音が聞こえると殺気立った真剣な顔つきで舌打ちをする。

「……………うるさい」

完全に拳を引き抜くと、彼女は木に向かって思いっきり蹴り飛ばした。

や……………八つ当たりー!?

星はさっきからツッコミすぎて口が閉まらない。  
すると急に影が濃くなった。見上げてみると、蹴られた木が倒れてきたのだ。

「へ？ ちょ、ちょっと、嘘！ たすけ うわぁー！」

星はあわてて堀の影から飛び出す。門の外へ飛び出そうと無我夢中に走ったが、

「ぶへえ!？」

鉄格子が閉じられていたのに気づかず、勢いよくぶつかった。その声に気づいた美鈴は、急いで駆けつけた。

「だ、大丈夫!？」

そのときには星は目を回していた。星の顔面には、鉄格子の痕と鼻栓がついていた。美鈴はその顔を見るな否や、爆笑してしまった。星がさつきいた場所から轟音が鳴り響いた。

\* \* \* \* \*

「んぐう……」

小さな唸り声を上げながら、星は体を起こそうとする。冷たい……。顔面の清涼感を受けた。そして急に視界が明けた。

「わっ!」

突然明るくなったから、星はびっくりして跳ね上がる。眩しさを感じながら辺りを見回すと、すぐ隣に美鈴がいた。またあの救急箱と一緒に。

「す、すいません。またお世話に」

美鈴はタオルを絞った。

「いいのいいの。今日はたまたま修行していたもんだからね。昨日みたいにまたごろ寝していると思ったでしょ」

星はとても言いづらそうな顔をした。

「いいよ、言わなくても分かるから。そりゃあ昨日あんなの見せたらまたごろ寝すると思うよ。誰だってそうだよ。とぼっちり食らうのも仕方ないわ」

美鈴は照れくさそうに笑いながら言う。

「しっかし、あんな豪快に鉄格子にぶつかるといって離れ業はすいねえ」

「……」

それを聞くと星は顔が真っ赤になった。声を小さくしよぼつかせながら星は口を開いた。

「う……見苦しいところを……すいま……せん……」

星は言い終えないうちにがくと頭を落とした。恥情で頭を垂れる星を見て、美鈴は掛ける言葉が見つからなかった。何も言わず、ゆっくりと救急箱を閉める。そして少し間を置いて、美鈴は口を開いた。

「そ、そんなことよりも、今日は門番らしい所、見せれたかな？」

ちょっと苦し紛れの切り出しだった。しかし星は面を上げてきた。しかも美鈴の瞳を覗き込むように見つめている。ちょっと不思議そうな表情だった。

「へへ……やっぱり、変だったかな？」

美鈴は気難しそうな顔をした。

「そりゃあねえ。ギャップが激しいからそう思っちゃうかもね」

どこかがっかりしたような様子だった。ため息をつく美鈴。しかし星はその言葉に対し首を振った。

「そんなことありませんよ。格好良かったですよ!」  
「え?」

美鈴は驚いた顔をした。星はそのまま言葉を続ける。

「美鈴さん、だってあんな大きな樹を素手で壊したんですよ。それ  
って普通の妖怪でもなかなかできることじゃないです! 私だっ  
たらできませんよ、多分」

「た、多分って……」

「でも、最初はちょっと頼りない人だなんて思ってたりました。  
けど、今日みたいにすごい力を持っている人だと気づいたときはそ  
んな色眼鏡が吹っ飛んでしまいました!」

かなりのベタ褒めである。しかしそんなたない褒め方でも当の  
美鈴は

「ははは……そうかな?」

と満更でもなさそうな様子だった。

「私もあんな力があつたら、聖の役に立てるかもしれない……」  
「じゃあやる?」

「え？」

星は急に「やる」といわれて思わずきよとんとしてしまう。

「まあちよつと体鍛えたりするけど、でも寅さんがここに離れるま  
では簡単な気功ぐらいは覚えれるよ」

「えっでも……」

もちろん星は本気でなりたいと思っているわけではない。ただ、  
勢いで言ってしまった言葉だ。だが美鈴はそれを本気と思っている  
ようだ。

「あ、あのお……。じ、実はそこまで……」

星は美鈴の気持ちを思って、遠まわしに断ろうとした。しかし美  
鈴はそれを気にする様子はない。すると美鈴は星の両手を握った。  
そして真剣な顔で言う。目が虎の様に鋭い眼差しを放っていた。

「寅さん。仮にも私はあなたの上司だよ。わかる？」

つまり逆らえないということだ。正論といえば正論。なので星は  
黙ってうなずくしかなかった。それを見ると美鈴はまたいつもの陽  
気な顔に戻った。

「よっし！ そうと決まれば早速修行だね」

「えっ？ いきなりですか？ それに修行って……」

美鈴は指を差した。その方向は、森の中だった。

「あそこへ行つて素手で熊狩りかな！」

「あへ！？」

星はあまりの突拍子さに変な鳴き声（？）をあげてしまう。

「大丈夫大丈夫。寅さんだつて結構強そうな感じだし、熊程度で死にはしないよ」

「で、でも……無茶振りすぎますよお！」

「ああん？」

美鈴は横目でにらんだ。星は縮み上がって何も反論できない。

「うう………すいません……。いつてきます」

「はいよ！ がんばってきなさい！」

またコロッと表情を変えた美鈴に星は涙が出そうだった。

「南無三……………」

- T o b e c o n t i n u e -

## 二日目 意外（後書き）

長らくお待たせしてすいません、ZIRANです。

すこしのんびりしすぎました。話と推敲自体は7月あたりに終わっていたのですがその間に足の骨折ったり大学見学行ったりとしていました。9月からは大学推薦のためにしばらくPCを触らなかつたりしていました。あ、ちょうど先週試験を受けました。

いろいろ立て込んでおりながらその合間に投稿できなくてすみせん。

これからはまったりしつつも急いで生きたいと思います。

では。

## 三日月 地下

### 昨夜の命連寺

「さあ、どうするんだ。これから」

ナズーリンが炬燵で丸くなりながら皆に聞く。水蜜、一輪、雲山の三人は何も言わない。

「聖様と御主人が居ないのは表札のない家と同等。早急に連れ戻すしたほうが良いんだが……」

「問題は、その居場所……ね」

水蜜がため息混じりに言う。他もその言葉で頭を抱えた。

「姐さんはそこまで熱中しているのかしら……。でもあの紅魔館の吸血鬼のところに居るのだから、ひよっとしたら馬車馬のように働かされてるかもしれないわ」

ありえなくもない。ナズーリンと水蜜はうなずく。すると雲山が一輪の耳に敬こたてた。話が終わると一輪は口を開いた。

「雲山は『もしかしたら、吸血鬼の餌にされているやもしれぬ』と

言ってるわ」

雲山の一言で皆の顔色が一斉に悪くなった。ナズーリンは炬燵の上の湯飲みを取って、お茶を啜った。勢いよく喉に熱いお茶を飲んだため、「熱っ！」と声を上げてしまっていた。水蜜が心配そうに言う。

「そんな家畜みたいなことになってないといいけど……」  
「吸血鬼だけに……鬼畜」

ナズーリンがボソツと言った。雲山がまた一輪に敬てる。

「雲山が『上手いことを言っただつもりか』と言ってるわ」  
「う……」

ナズーリンは苦しそうにそっぽ向いた。

「それよりも、どうするの。紅魔館（しんまか）へ行くの」

水蜜の言葉で皆考えた。紅魔館は吸血鬼や昼間のナズーリンを負傷させた謎のメイド、そしてその他諸々の危険要素。正攻法では勝てない、と皆分かっている。故に少々姑息な手で進入しようと画策しなくてはならない。人手も少ない。

難解なこの問題の突破口を皆見出すため、しばらく思考の時間が過ぎた。外は未だ寒い風が吹きすさんでいる。隙間風が入っているのか、ヒョー、ヒョー、と風の悲鳴が部屋に響き渡る。その悲鳴が、4人の不安と焦りを煽る。

そしてナズーリンが口を開いた。

「……とりあえず、できることは……」  
「なにかわかったの？」

水蜜がナズーリンに迫る。

「寝る！」

全員すっころんだ。

「ね、寝るって！ どういうことよ!!！」

「姐さんの命がかかっているかもしれないのよ！ 分かっているの！」

皆ナズーリンに詰め寄った。ナズーリンは迫る三人を落ち着かせ、それぞれの場所に座らせた。そして咳払いをして切り出す。

「いや、こんな夜遅くまで考えていてもどうにもならない。一旦寝て、明日じっくり考えよう」

「明日じっくり考えてどうするの!」

水蜜が炬燵の机を思いつき叩いた。そして水蜜は声を荒げながらひとつの案を呈した。

「いつまでも小田原会議をやるわけに行かないわ。朝の早いうちに突撃をかければ何とかなるはずよ!」

その策にナズーリンは芳しくない表情で首を横に振った。

「それは危険すぎるだろ。吸血鬼は朝に弱いからって、無策に突撃できるか」

「けど……」

二人の応酬をしている間、雲山は一輪に何か言っている。そして一輪が二人の応酬をさえぎるように話し出す。

「あーいいかしら」

二人は一斉に一輪のほうを向いた。そして一斉に、

「嫌!」

と言いつつ捨てた。しかし一輪は折れずに言い続ける。

「雲山は『明後日の早朝にでも出れば良い。焦りは危険ゆえに』と  
いつているわ」

「なっ!?!」

「私もそれに一理あるわ。さすがに今日は遅いし、ナズーリンの言  
うように一旦作戦を考えたほうがいいわ」

一輪と雲山の後押しがあり、ナズーリンはどや顔になった。

「と、いうわけだ。雲山も一輪もそう言っている。ムラサひとりで  
行きたかったら行ってもいいぞ。助けられるかどうか保障できないが」  
「ぐ……」

水蜜は唸るしかなかった。するとナズーリンは大きなあくびをし  
始めた。

「反論できない、か。やれやれ……。今日はもう寝る。じゃあ先に  
失礼する……」

そういつとそそくさと部屋を出て行った。一輪や雲山もそれに続  
いて部屋を出て行く。一人残った水蜜は炬燵の中にもぐりこんだ。

そして頭を抱えながら小さく言う。

「大丈夫かな……聖……」

心配に絶えぬ水蜜の今日最後の言葉だった。

### 三日目の紅魔館

「では今日も、一日がんばりましょう」

広間でメイドたちが朝の集会を終えてそれぞれの勤務地へ散っていった。白蓮の隣に居た星は心配そうに声をかけた。

「ひ、聖？ あの、目の下に……」

星の目線の先には、白蓮の目の周りには地底の鬼とは違う『くま』がその目の周りにのっそりと寝転んでいる。冬眠中なんだろう。

白蓮はそんな二匹の『くま』を持ちながら星の前ではいつものようにつこりと微笑んだ。

「大丈夫ですよ？ それよりも星のその顔はどうしたのですか？」  
「ふえ？」

星の顔もたいそうなものを<sup>いじ</sup>拵えていた。絆創膏を右頬に2箇所、左目は赤く腫れて、額には大きなたんこぶがあった。

「大丈夫ですか？」

「平気ですよ」

「でも痛そう………あ、ちょっと待って」

すると白蓮は星の両頬をむにと持った。モチモチの感触。

「ひえ！？ ひぎり？（聖？）」

やわらかい頬なので星はやられるがまま口が伸びる。突然やられたものだから星はびっくりした。だが白蓮は頬から手を離すと、今度は両手を星の頭を支えるようにやった。

「じっとしてっ？」

すると白蓮はおもむろに星の額のたんこぶに口をつけた。星は頭が噴火した。それだけでは終わらない。舌でやさしくたんこぶを舐め始めた。ちゅぱちゅぱといやらしい音を立てながらたんこぶを舐

めていく。星は頭から煙を出し、口をぱくぱくさせている。完全に  
インストールした。

それを見つけた咲夜がひとつ咳払いをした。

「その二人？」

だが気づいてない。

「ちよつと……」

「ふあい？ あ……」

白蓮はたんこぶからすぐに顔を離した。周囲の妖精メイドたちが  
二人を見ている。困惑した表情で白蓮は笑顔で取り繕った。

「とりあえず、こつちきなさい……」

\* \* \* \* \*

「まったく、あなた達はどついつ神経してるの？」

広間の隅で咲夜が二人を説教していた。右足が何度も床を踏む。少々苛立っている。白蓮と星は何も言わずと頭を垂れている。白蓮はこらえていた。しかしここで「怪我をした人を見過ごすのは人道的に良くない。怪我の治療をただけ」と言えば、それは単なる言い訳にすぎないからだった。

「頭ずっと下げても、どうにもならないでしょ？」

それでも二人は黙ったまま頭を下げたままだった。しばらく沈黙の時間が訪れた。周りは妖精メイドたちがせわしく動く音とかすかな雑談のような声が小さく、はつきりと三人の耳に入る。

時間が過ぎる。現状は変わらない。痺れを切らした咲夜はナイフを取り出した。するとそのナイフを床に思いっきり投げた。頭を下げていた二人は飛び上がってお互いを抱き合ってしまった。

咲夜は言った。

「あなた達みたいなの『ゆるゆる』な人には、少し痛い仕事をやらせたほうがいいわね……」

無表情だが、目は苛立ちが見える。星は恐る恐る訊く。

「い、痛い仕事って……一体なんですか？」

咲夜は下を向いた。二人もそれに合わせて下を向く。星は分から

ずまた訊いた。

「？ あの……床掃除……ですか？」

「違う」

即答だった。すると咲夜は二本のナイフを両手に取り出した。そのナイフをおもむろに白蓮と星の首元をそつとかすめる。血は流れなかったが、一歩間違えれば確実に殺せるくらいの至近距離だった。急所を突かれた二人は固唾を飲んだ。

「これくらいの覚悟が居る仕事ね」

咲夜は言った。二人は何も言えないまま、咲夜は静かにナイフを二者の首元から離し、それを消した。そしてそのまま二人の間を通り過ぎていった。

「腹据えなさい……」

咲夜はそれを最後に忽然と姿を消した。

「ひ……聖……。これは……」

星は緊迫した面持ちで白蓮に言う。白蓮は右手をぎゅっと握り締めて言った。

「行きましょう」

その右手にはいつの間にか鍵が握られていた。どうしてその鍵があるのか、星には分からなかったが、白蓮にはその意味が分かっていた。

\* \* \* \* \*

地下の仕事ということで二人は湿った暗い廊下を歩いていた。二人は地下の回廊にいた。星が不安げに白蓮に尋ねる。

「聖、なんだかいやな予感がします……」

「そうね……。他の妖精メイドたちが顔色変えたのも、なんとなく分かってきたわ」

白蓮たちの足音だけが静かな回廊に寂しくこだましていた。

ここに来る前に、二人は仕事先の場所がわからないから広間に居た妖精メイドたちに尋ねた。するとそのメイドたちはそろって顔を青ざめ、同情の言葉をかけていた。しかし彼女達はかすかに恐ろし

さを感じるだけで、大それた恐怖感はあまりなかった。どういうものなのか、この目で知らないからだ。しかし、この地下廊下の雰囲気と高い湿度が、まだ目に触れてないというのにどこことなく恐怖心が煽られる。

「ふにゃっ!?!」

突然星が飛び上がって白蓮に抱きついた。

「星? ど、どうしたのよ……」

「い、いまなにか物音が……」

するとけたたましい鳴き声が背後から響きわたり、辺りにその声  
が飛び散った。

「なんだ……蝙蝠かあ」

星は安堵すると、すぐに白蓮からはなれ、ふう、とため息をついた。しばらく歩いて星が白蓮に話しかける。

「メイド長は言ってましたね、仕事は痛い話だって。どれぐらい痛いんだろっ……」

星はじつと自分の手を見つめていた。

「切り傷程度だといいですね」

白蓮はにっこりと微笑んで振り向いた。

\* \* \* \* \*

暗い地下通路の終点にたどり着いた場所は、鉄格子だった。湿った空気が得もいえぬ雰囲気を醸し出す。二人はその雰囲気の中に居た。白蓮は渡された鍵で大きな南京錠を開ける。鉄の擦れる音とガチャツという鍵が開く音共に南京錠は開いた。そして鉄格子がゆっくりと開きだす。耳障りな金属のけたたましい音を上げながら。音が鳴り止むと、洞穴のように真っ暗な部屋だけがあった。二人は固唾を飲んで恐る恐る足を踏み入れる。

星は元から縮み上がってるが、さすがの白蓮もこの雰囲気に圧倒され、少々臆病な気持ちになっていた。

「あの一……」

白蓮はがんばって声をかけた。しかし返事はない。

「あの一……」

もう一度声をかけてみた。しかし返事はない。  
星が白蓮の服を引っ張り、言った。

「聖、返事ありませんよ？ 嫌がらせかもしれませんし、戻ってメ  
イド長に」

く……く……。

「ん？」

星の服が妙に引っ張られる感覚を覚えた。ふと足元を見た。

「え？ 子供？」

白蓮も星のほうに振り向いた。彼女の足元には小さな女の子が指  
をくわえて立っていた。黄金色の髪をしている。すると白蓮はその  
子を抱き上げた。

「あら、どつしたのでしょうか？ こんなところにこついつ子が居る

なんて」

幸せそうな顔でその子の顔を見つめる白蓮。すると女の子はおもむろに手を出すと、白蓮のほっぺをつまんだ。そしてへの字口で言った。

「あなたってさつまいもみたいな人だけど、ほっぺはおもちみたいだね」

「はひ？」

ほっぺをつままれながら白蓮はきよとんとした顔をする。星も鳩が豆鉄砲を食らったような顔で見つめている。白蓮自身も「さつまいも」と呼ばれる意味を汲み取ることができなかった。すると女の子は「キャハハ」と笑い出してほっぺを思いっきり引っ張って離れた。

「いひゃい…」

悲鳴を上げて、白蓮はつままれた頬をさする。つままれた頬が赤くなっている。そばで見えていた星が何かに気づき、白蓮に言った。

「ひ、聖！もしかしたら、この子が……」

「ふえ？……あ」

二人は驚いて見つめ合うと、女の子の顔をじっと見つめた。女の子は頭上にクエスチョンマークを浮かべるような顔つきで首をかしげる。

「痛い仕事の相手って……」

「この子……」

「つまり、この館の妹の……」

女の子は二人の顔をキョロキョロ見て「私？ 私？」と自分に指差しながらつぶやいている。そして二人は声をそろえて言った。

「「フランドール・スカーレット！」」

そう呼ばれた女の子は逆に二人の反応に思わずびっくりしてしまっただ。

### 三日目 地下（後書き）

こんにちわ。いつもどおりのZIRANです。大学受かってました。けど合格発表の日に胃腸風邪を患ってしまうと、うれしいんだかなんだけ……

今回は割りと早めに投稿できたことが良かったです。これからもこれくらいのペースで投稿できたら尚いいなあ、と切実に思っています。

今回は大きな展開はありませんが、キャスト的に多分次回は騒がしいんでしょうね（遠目）

という訳で、閲覧ありがとうございます。

### 三日目 懐閨

「お嬢様、失礼します」

咲夜が扉から入ってきた。その部屋は大きく、薄暗いところだった。その部屋の中央の、長い会食用のテーブルの奥で一人ティーカップをすすっている人が居た。お嬢様と呼ばれた、レミリア・スカレットだった。

「他のメイドたちからちらっと聞いたわ」

ティーカップを静かに置いた。咲夜は表情を変えずに居た。

「あの子の世話をやらせたそうね。お灸据えにも程があるわね」

咲夜を責めるような言葉であるが、白蓮たちに対する皮肉の意味のほつが強くこもっていた。咲夜はそれを聞くと一瞬顔に笑みを零した。

「あの二人なら死にはしないと思います。そういうことは、お嬢様が一番よくご理解していると……」

「そつりゃそうだけどね」

咲夜は言葉を続ける。

「それにしても、お嬢様もお優しいのそうでないのか……」

「何が？」

「ええ、だって、妹様の面倒は見たいけど、私ではなく、完全な他人任せですから。それが優しい心の現われなのか……」

レミリアはそっぽを向いた。そしてそのまま何も言わなくなった。

「では、失礼いたします」

咲夜はそのレミリアの姿を笑顔で見つめながら部屋を後にした。

\* \* \* \* \*

「うわぁ、ながい髪の毛っ」

地下ではフランが白蓮の髪に興味を示していた。

「紅魔館<sup>（レムリア）</sup>じゃあ長い髪の毛って言ったらパチュリーぐらいしか居な

いから珍しくってね。パツと見、さつまいもみただなーって思ってたけど、やっぱり珍しいなーって思って！」

フランは見た目に合わないほどの饒舌で、白蓮の髪を弄繰り回していた。髪の手つぽをスパゲッティを食べるときのようにくるくる指に回したり、髪を暖簾のようにくぐったりしているなど……。白蓮は少し困った顔はしているが、穏やかな表情だった。ただ一人そこで不安をぬぐえないのが、星だった。

星は何故、フランがこのような地下に事実上軟禁状態にされているのか、という疑問が頭に残っていたからだ。この紅魔館で、誰にも合わせないように地下で軟禁されているということは何か理由がある。それが主の判断であるならば……。

星は疑問にふける。フランに好きなように弄られてぐしゃぐしゃの髪の毛になった白蓮は、星がフランに対して警戒心を抱いていることに気づいた。すると白蓮は星の耳元にそっと囁いた。

「星、そんな怖い顔だと、向こうも怖がりますよ。私達はこの子を南無三しにきたんじゃありません。お世話をしにきたんですよ」

ちなみに今の会話で言う「南無三」とは、成敗、説教という意味だ。

星は白蓮の言葉にはっ、と気づく。顔をばちんばちんと叩くと、星は白蓮のほうにこっと笑った。

傷だらけの笑顔を見た白蓮も、にっこりと微笑んで言った。

「ふふ。あなたらしい、いい顔になりましたよ」

「そ、そうですね」

星が目をそらしながら言う。頬が赤いのは、叩いただけの赤さではない。

「そうですね。聖が言うように、お世話をしに来たんですから、ここはいい空気で一生懸命……わふあ!？」

星の不思議な悲鳴を上げた。フランが頬をぷう、と膨らませて星の頬をつまんでいた。白蓮は「あらあら」と見ている。フランは拗ねた目で言う。

「もー、お話長いからつままないでしょおー。なんかおもしろいことやってよ」

「うふえ……。と、とりあえずほっぺ離してください……。あっ!」

フランは引っ張って頬を離れた。星は弾かれ、つままれたところを撫でる。

「ええっと……おもしろいことですか……」

「そっつ!」

星はこういう即興の芸は苦手だった。特に笑を取る芸に関して

めっぽう苦手だった。星は白蓮のほうを向いて助けを求めた。だが、白蓮は微笑んで見つめているだけ。

孤立無援。そう悟った星は窮地に立たされた。濃い弾幕をよけたり、苦手なスペルカードを取得するよりもはるかに難関だった。

いつまでたつてもやらない星にフランは痺れを切らした。

「だあああ！ もー！ おーそーい！！」

「ふえ！？ い、今から！ 今からやりますよお……」

幼女に縮み上がる虎。これがかつて毘沙門天の代理人を勤めていた身であったが……。それはともかく、星は時間稼ぎをしようとフランに言い聞かせようとしたが、フランは首が飛んで行くくらい思いつき横に振った。

「嫌っ！ まちきれないもん！」

「待ってくださいよお……」

「いやーだー！ だったら！ 私がお題出すっ！！」

白蓮は蚊帳の外で二人の応酬を眺めていた。

「ふふ。星、がんばって」

彼女はまるで母親のような眼差しで見ている。星に助け舟は出さないが。

「お題は……バター！」

「バ……バター！？」

「知らないの？ 虎に食べられそうになった子供が服を脱いでいつて虎に上げたらヤシの木周りをグルグル廻って、最後はバターになるって言う話っ！」

「虎ですけど！ 無理ですよお！」

フランは星の頭にかぶりついている。必死でそれを振り払おうと走り回る星を白蓮は見つめていた。すると、何かに気づき二人のほうへ歩み寄った。白蓮はフランに言った。

「もしかしたら、あなた、お腹空いてるんでしょ？」

「えっ」

頭をかぶりついていたフランは白蓮のほうを向いた。鳩が豆鉄砲を食らったような顔で白蓮を見た。

「なんで………わかったの？」

驚いた顔をして聞くフランに、白蓮はにっこりと微笑んで答えた。

「簡単なことですよ。あなたさっき私の髪の毛のことを『さつまい

も』っていつたり、『バター』とか言ってたりしてたでしょ？  
そこからお腹空いたんだ、と思いましたわ」

フランは啞然としたまま白蓮を見ていた。頭にしがみついたままだから、下の星は頭を重そうに少しよろめき、顔を真っ赤にしている。

微笑みながら白蓮は言った。

「じゃあちよつとお菓子でも用意しましょうか」

「えっいいの？」

フランは飛び上がった。星はその勢いでももいつきり倒れる。白蓮は優しく頷いた。

「じゃ、じゃあ、紅茶と……ケーキ！」

「はいはい」と母親のような笑みで白蓮は部屋を後にした。

そそくさと出て行く白蓮を見ているフランの背中に、濃い影が掛かっていた。

「……いてて。おながが空いてたんですか……」

先ほどぶっ飛ばされた星が頭を摩りながらゆっくりと起き上がった

た。

「最初から言ってくれればいいのに」

フランは答えなかった。振り向かないまま、小さな拳がぎゅっと握り締めている。星はそれに気づく。

「何か言えないことでもある」

「知らない!」

そつと近づいた星をフランは片手で突き飛ばした。星は予想以上にかなりの距離を吹き飛ばされた。星は言葉を続ける。

「自分の中で抱えたままだと、言えることも言えないよ!」

「そんなの知らない!」

フランは必死で星の言葉から逃れる。星も説得しようとするも、フランは耳をふさぐ過剰な拒絶反応。とても聞いてくれる様子でなかった。けれども星は退かなかった。

「……………。でないと、どうすれば……………」

フランは黙ったまま。変わらないこの状況の中。

「……聖がくるのを待つしかない……」

星はついに白蓮に助けを求めだした。自分ではどうしようもできない。なぜなら、白蓮のように、抱擁し、救える力は無いと。自分が嘗て白蓮に救われたときのあの力は無い……。と。星は檻の中から白蓮の帰りをただただ待つしかなかった。

檻の外の光は弱い光がいくつも照らしており、目視できるのはその光が発するわずかな範囲だけで、足元はまったくの暗闇だった。

\* \* \* \* \*

奥から駆け足の音が響いてくる。手には、ケーキとティーセットを乗せた盆を持っている。白蓮はフランのための菓子を取りに行く途中で咲夜に会ってしまった。嫌味を少し言われつつも笑顔でやり過ごし、地下に到着した。

「ごめんなさい。ちょっといろいろあって遅れちゃった」

白蓮は笑顔で駆けながら鉄格子の中へ入ってきた。しかし、一歩

踏み入れたとき、その足が止まった。白蓮は、この牢の中がさつきと違って重い空気になっていたことに気づいたのだ。薄暗いこの部屋の中で星とフランが距離を離して体操座りしている。

「あの……おやつ、持ってきましたよ？」

するとフランが何も言わずに立ち上がった。白蓮の元へ歩いて行くくと、盆の上に乗っているケーキを奪い取った。黙って食らい付く。

「……喧嘩、したのですか？」

がつつくフランのそばに座り込んで白蓮はそっと尋ねる。フランは口いっぱいケーキをほおばりながら首を横に振った。否定した。

「そっ……」

白蓮はしばらくフランがケーキを食べる様子をじっと見ていた。リスのようにせわしく頭を動かすフランを白蓮はじっと見ていた。すると、ずっと忙しく食べ続けていたその頭が急停止した。小さなフランの頭がゆっくりと白蓮のほうへ向いてきた。

「お……お茶……」

青ざめた顔をして消えそうな細い声で白蓮に助けを求めた。白蓮は急いで紅茶をカップに注ぎ、フランに手渡した。真っ赤な紅茶が、ぐーっと勢いよくフランの喉へ流し込まれる。喉のつまりが取れて、ほっ、とフランは大きく息をつく。

「がつつくからですよ」

白蓮がにこやかにフランに言う。フランは拗ねたようにぷーっと頬を膨らませながら、残ったケーキをまた食べ始めた。白蓮はフランを見つめながら思った。この子は、決して危ない子ではない。接し方によっては、とても可愛らしい少女だ。遠ざけられれば、受ける愛情は皆無だ、と。目の前でおやつをがつつく華奢な少女の姿を見つめると、フランの扱いに、白蓮の胸には大きな痛みを感じていた。

そんな憂う視線も露知らず、ケーキを平らげたフランは満足げに腹太鼓をぺちんぺちんと威勢よく鳴り響かせた。そんなフランをよそに、先ほどから傍観していた星は彼女と視線が合わないように白蓮の元へ行った。

「あの子は、なにか隠しているというか、誰にもいえないようなことを抱えている気がします」

フランに気づかれないようにひっそりと白蓮に敬てる。白蓮は静かにうなずいた。

「さっき話しかけたら、急に怒って拗ねたので……」  
「それで二人とも黙ってたのね」

白蓮はさっきの重い雰囲気の原因がわかったのでほっと胸を撫で下ろした。しかし、些細なことを聞いただけでもかかわらず過剰な拒絶反応を見せるフランへの疑問はまだ消えたわけではない。白蓮の中で一つある行動を執行しようと決意した。

「私も気にはしているんですけど、こころも拒絶されると、どう対処したら……聖？」

星が言ったときには白蓮はそばに居なく、いつの間にかフランの隣に居た。白蓮はフランに言った。

「星から聞きました、拗ねたそうですね」  
「……」

フランは気まずそうに目をそらす。

「言えない事があるんですね」

微かにフランの視線が揺らいだ気がした。白蓮はその微かな反応

を逃さなかった。白蓮は言葉を続ける。

「無理に言わなくてもいいです。まだ、自分の口では言えないんでしょっ」

「……うん」

フランは蚊の鳴くような小さい声で答えた。星は自分と同じようなことを聞いたが、返事をしたことは無い。改めて白蓮の力に驚きと憧れを抱いた。すると、白蓮はフランを抱きかかえ、牢から出ようとした。俵担ぎされたフランは足をじたばたさせながら言った。

「ちょ、ちよつと、どこいくの!？」

「ここに居ては、何も解決しませんよ。だから、外へ……」

「えっ!?! ちょ、ちよつとどういう……! 離してよ! 離して!」

フランは白蓮の方をポンポン叩く。じたばたしてどうにか離れようとするが、白蓮はまったく動じない。後ろから付いて行く星とフランは目が合った。

「あっ、とらちゃん! この人なんとかして!」

「と、とらちゃん!? あ、……でも無理です」

思わぬ呼ばれ方でびっくりした星だったが、フランの頼みは断つ

た。すると顔に何かをぶつけられた。

「バカ！」

カチャーン、と鈍い金属の音が響いた。星はスプーンをぶつけられた。

「子供って、怖いなあ……」

ぶつけられた右上の額をさすりながら白蓮の後に続いていった。しかし、星に対して素直に怒り、表情を見せたことに星は喜びを感じていた。

### 三日目 懐閻（後書き）

こんばんわ。いつものZIRANです。

今回はフランですが、予想以上に長い話になってしまって、ちょっとあちゃーって思ったりします。

ですので、今回の三日目はまだまだ続きます。

そしてこの間に、ナズーリンたちも（おそらく）救出策を考えているでしょう。

といっても、その救出策の大枠すら浮かんでない状況、大丈夫か！？  
そんなわけで無計画に進んでますが、次回も宜しくお願いします。

### 三日目 吐露

「ふう……」

レミリアは自室のベッドに座っていた。紅を基調とした薄暗い部屋の中で、憂鬱そうにため息をついている。手に持っているティーカップを眺めては、大事そうに両手で持っていた。そのティーカップは、ところどころに罅割れが入っていた。

レミリアは部屋から出ようと、ドアノブに手をかけた。そのとき、騒がしい走り音が聞こえてきた。

「？ 何」

ドアを開けた瞬間、レミリアは強い衝撃で吹き飛ばされた。そしてそのまま部屋の壁にぶつかった。そこからレミリアの意識が一瞬途切れた。

\* \* \* \* \*

「大丈夫なんでしょうか？」

「大丈夫よ」

「ドア壊れちゃったよ」

複数人の声がレミリアの耳に入る。聞き覚えのある声だった。徐々にポリウムが上がり、音はより鮮明になっていく。そして視界が徐々に開き、レミリアは吹き飛ばされてからようやく意識を取り戻した。

「んな!？」

「わきゃ!？」

レミリアがびっくりして椅子から飛び上がる。それに反応して、白蓮の隣に居たフランも飛び上がる。

「あ」

「う……お姉さま……」

二人とも目が合った瞬間、互いに顔を逸らし、気まずそうな雰囲気で居た。レミリアは仏頂面になり、レミリアは白蓮の影に隠れてそっつと覗いていた。レミリアは目もあわせず、白蓮に言った。

「どつという風の吹き回しか知らないけど、はやくその子を地下へ戻してきて」

「それは出来ません」

即答だった。レミリアはゆっくりと白蓮のほづを見る。

「なんでよ。あなたはメイドよ。私の僕なのよ。命令に従えないって言うのかしら」

「姉妹の関係を崩壊させるまで、命令に従いたくはありません」

姉妹の関係？ 星はふとフランの顔を見た。フランは白蓮の後ろでレミリアと目を合わせないように隠れている。白蓮は言葉を続けた。

「喧嘩したのでしょうか」

「だから何よ」

「このまま姉妹の仲が悪くなってもいいのですか？」

レミリアは少し黙り込んだ。しかし、白蓮の言葉を振り払うように後ろ髪を払うと、白蓮の陰に隠れるフランに指を差しながら言った。

「あんたみたいなの新入りメイドに指図される覚えはないわ。このまま姉妹の関係が無くなったとしても、私はかまわないわ！ それで何も事は荒れずに済むのよ！」

「違うー！！」

白蓮は机を思いっきり叩きつけて真っ向から否定した。レミリア

はびつくりしてまた椅子から飛び上がった。フランは怖くて星のほうへ逃げた。叩きつけられた机には拳の跡が残り、穴が開いている。

「それでは、あなたの気が済むだけじゃないですか。それは結局自分自身が事実から逃げたいために言ったのでしょ。あなた自身の気が済んだとしても、あなた自身が解決したとしても……この子の気持ち、この子の寂しさは解決しないまま長い時間をすごすのですよ」  
「……」

レミリアは何も言わなくなった。白蓮とは目を逸らし、罰が悪そうな顔で両手を股につっこんでいる。

「しばらく考えてみてください。相手の気持ちと自分の心に……」

白蓮が最後に言つと縮み上がっているフランを抱きかかえ、部屋を出ようとした。

「待つてよ……」

小さな声が聞こえた。白蓮たちは足を止め、ゆっくりと振り向く。レミリアが複雑な面持ちで、じっと見つめていた。白蓮はまたいつもの穏やかな顔に戻り、レミリアのすぐそばまで歩み寄った。フランを抱きかかえたまま。すると、レミリアがこう言った。

「二人だけに……してくれるかしら……」  
「ええ……」

白蓮はフランをおろすと、星と一緒に静かに部屋を後にした。  
扉が閉まると、フランは不安そうにあたりを見回した。

「……とりあえずさ……座ろ……」

レミリアが言った。フランはぎこちなく椅子に座る。しかしそれでもフランは曇った面持ちのままだった。

レミリアも、なかなか目を合わせようとせず、どこか落ち着かない様子で居た。どう話を切り出せばよいのか、レミリア自身も悩んでいた。下手に言ってしまうばフランはどう思うのか。今までレミリアが思いもなかったことだった。フランもフランで、ここからもう逃げたい気持ちだった。

するとレミリアは意を決して切り出した。

「あのさフラン。もう私怒ってないからさ……。その、フランもそんなにね……不安そうな顔しなくても」  
「……」

フランは黙ったままだった。唇をかみ締めてうつむいたまま。

「ねえ……なにか言ってよ……。私も悪かったから」  
「……だって……」

ようやくフランが声を出した。蚊の鳴くような小さな声であったが、レミリアは少しだけ安堵した気持ちになった。フランはレミリアと目をあわさずに震えた声で話し出す。

「だって……私が……私があやまつても、お姉さまは……」

「だから、もう私は怒らないっていつてるじゃないの」

「でも……！ でも、お姉さまは、私がどれだけあやまつても、どれだけごめんなさいしても……すぐに地下のお部屋に入れるじゃないの……！ 私……とても寂しかったんだよ！」

フランのつぶらな瞳から大粒の涙がぼろぼろと零れ落ちていく。レミリアはその言葉に心臓を射抜かれた気分だった。鼻水をすすり、上ずった声を上げながらフランは心に仕舞い込んだ思いを吐き出した。

「お姉さまは……いつも、いつも私がちよつといたずらをする……すぐに地下のお部屋に連れて行って、ずっと閉じ込めるもん……！ 私が泣いて、あやまつても、お姉さまはいつも無視してどこかいつちやう！ 私……そんなお姉さまが大っ嫌いだった！ 今も嫌い！ だから……だから」

ぎゅっ

フランは言葉が出なくなった。抱きしめられた、感覚がそこにあつたから。レミリアはその小さな体で、フランの幼い体を抱きしめた。傷だらけの心を庇い癒すように。そしてフランの帽子を取り、その手で、やさしく撫でた。悲しみの涙でずぶぬれになった心を拭うように。そして、レミリアはそつとフランの耳元でささやいた。

「じゅめんね……」

レミリアの瞳にも、涙があふれ流れ出していた。そしてしばらく、二人は互いの隔たりを埋めあうように、抱き合つたまましばらくの時間をすごした。その様子をドアの隙間から覗いていた白蓮と星は安堵に満ちた微笑を浮かべていた。

\* \* \* \* \*

その後、白蓮たちはレミリアたちを部屋に残し、地下牢の掃除やおやつのお皿の後片付けをした。予想以上に汚れが目立っていたから、二人は夕暮れ近くまで掃除に従事させられた。

二人が牢屋から出ようとしたとき、目の前に突然咲夜が現れた。二人は相変らずびっくりするのだが、少し咲夜の登場に慣れてきた様子で、以前ほど驚きはしなかった。咲夜は悠然とした様子ですつと二人に話しかけた。

「いいお知らせをしにきたわ」

「いいお知らせ？」

白蓮が聞く。咲夜はうつすら微笑んで頷いた。

「お嬢様が、あなたたちのために晚餐をお開きになったわ。すぐに部屋へ戻って、そのための服に着替えてきなさい」

「えっ……」

「じゃあ」

咲夜はまた一瞬に消えた。二人はどういうことは分からなかったが、星の大きな腹の音ですぐに部屋に戻ることにした。

\* \* \* \* \*

「あら、随分と早くきたじゃないの」

咲夜が懐中時計を片手に扉の前で立っていた。

「どうして晚餐を開いたりしたんですか」

星はたずねた。咲夜はふつと微笑を交わすと、血色の良い唇がうっすら開いた。

「あなたたちのお陰よ。姉妹の仲を元通りにしてくれた礼をしたいということだ」

白蓮の星は目を見開いて見つめ合った。

「そもそもどうして二人は喧嘩なんかしたのですか？」

星がたずねた。咲夜は少し言いづらそうなそぶりをしながら口を開く。

「そうね……。簡単な話よ」

「そ、それは……」

「……おやつのプリンを取り合いから始まったわ……」

「えっ!?!」

二人が目を丸くして驚きの声を上げたとき、大きな扉が音を立ててゆっくりと開きだした。咲夜がふつと微笑むと二人に手をさし伸ばした。

「さあ、宴の時が始まるわ。遠慮せずに、楽しんでいきなさい」

白蓮と星の二人は、啞然としたまま吸い込まれるように宴の中へと入っていった。

\* \* \* \* \*

### 命蓮寺

白蓮たちが宴の中に入る3、4時間ほど前の昼下がりの縁側では、水蜜が座り込んでいた。思い悩んでいる様子だった。

「やっぱり、心配だ……」

大きくため息をついて頭をがっくりと落とす。その様子に気づいたナズーリンは、声を掛けた。

「何をそんなに心配する」

「ナズーリン……」

ナズーリンは水蜜の隣に座り込んだ。相変わらず冷静な面持ちだった彼女を見て、水蜜はうらやましい半分、怒りも感じていた。

「とりあえず私がある程度の段取りを考えてある。君はそれに従ってくれればいい」

「でも、それって、話し合いによる交渉でしょ？」

「……」

図星だった。ナズーリンは苦し紛れに言う。

「どうしようもないだろ。ほかに考えようたつて、大体は実力行使に近いものばかりだし、交渉以外何もないだろう」

「でも二人を引き渡せれるほどの材料があるわけ？」

「それは……」

ナズーリンは言葉を詰まらせた。水蜜はあきれたようにため息をついた。

「それでよく交渉しようなんて……。うちにはちょっとしたお守りぐらいか、仏像ぐらいしか……」

「仏像……か」  
「え？」

水蜜はいやな予感がした。立ち上がるうとしたナズーリンの肩をすぐさまつかみ、引き止める。

「ま、まさか本気で寺の仏像を使うんじゃないでしょうね！ そんなことしたらバチ当たるわよ！」

「いや、仏像ではない。別の代物だ」

「べっ、別って言ってもいったい何を」

するとナズーリンは水蜜の手を振りはらった。

「聖様をここへ戻したいと思うのが君の意向だろ？ 私はその意向に従って策を練っただけだ。それが嫌なら、私は何もしない」

水蜜はただ、遠ざかるナズーリンの姿を後ろで見つめるしかなかった。

「そういえば、ナズーリンもそうだけど一輪もみんな、私が助けたいと言っから……だったら」

だったら、もう少し、みんなを信頼しよう。

水蜜は薄暗い奥まった仏間を見つめながらそつ心に誓った。

- T o b e c o n t i n u e -

### 三日目 吐露（後書き）

1カ月半ぶりです。Zirranです。  
ながいながい三日目が終わりました。まだあと四日もあると考える  
と気が遠い……。もう別の小説も書きたい、というかそろそろ連載  
に私自身が飽きてしまったという状況で、次作からは短編ばかり  
出していきたいなあって思っています。  
というわけで次回も宜しくです。

車校行ってます。実車大変で、もしかしたら仮免すら危うい状況。  
もうやだ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1804k/>

---

聖者の気紛れ

2011年10月6日06時52分発行